は　じ　め　に

日ごろより本県の就学前の教育・保育の振興にご尽力いただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

さて、平成30年４月に施行された保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、変化の激しい未来社会を「生きる力」として、必要な資質・能力が示されました。幼児教育においては、生きて働く「知識・技能の基礎」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等の基礎」、自ら学び、実際に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」です。特に、乳幼児期は、その発達の特性から、一人一人に応じた、遊びを中心とした総合的な指導を通して、改訂（定）のキーワードにもなっている「主体的・対話的で深い学び」を実現することが求められています。

いうまでもなく、乳幼児期は、生涯にわたる生きる力の基礎が培われる重要な時期です。保育所・幼稚園等では、子ども一人一人が直接的・間接的な体験を通して、自分らしさを発揮しながら、人と関わる力や思考力、感性や表現する力などを育んでいく教育・保育の実践が求められています。

そこで、保育者の皆さんが、よりよい実践を進めていくために、日々の教育・保育の実践資料として、「指導計画・園内研修の手引き【改訂版】」を作成しました。

本書は、一人一人の子どもが乳幼児期にふさわしい生活を展開していくための指導計画（日案）の作成などについて具体的な事例を交えながら示しています。それぞれの園の実情に応じた指導計画の作成や園内研修に取り組んでいただくために、本書を積極的に活用していただきたいと思います。

皆様方には、本県の就学前の教育・保育の充実に向けまして、今後ともご支援・ご協力をいただきますようお願いいたします。

令和２年３月

高知県教育委員会事務局幼保支援課長
戸田　京子

目　　次

◇プロローグ

第１章　乳幼児の遊びと保育者の役割

Ⅰ　乳幼児にとっての遊びとは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　1　幼児教育において育みたい資質・能力　1
　2　乳幼児期の遊びは学び　3
　3　遊びを通しての総合的な指導　4
Ⅱ　保育者の役割・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　1　子ども理解　5
　2　環境構成　8
　3　心のよりどころ　11
　4　受容的、応答的な保育　12

第2章　保育の計画

Ⅰ　保育の計画から評価まで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　1　「全体的な計画」「教育課程」とは　13
　2　指導計画とは　15
　（１）長期の指導計画（年・期・月）
　（２）短期の指導計画（週・日）
　3　記録と評価　17
　（１）記録　（２）評価　○保護者と共に　○環境の構成
Ⅱ　明日の保育の計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
　1　指導計画（日案）の作成の流れ　21
　2　指導計画（日案）の作成のポイント　23
　計画１　子どもの姿を振り返り、記録しましょう　23
　計画２　ねらいと内容を設定しましょう　25
　計画３　環境構成を考えましょう　27
　計画４　保育者の援助を考えましょう　29
　実践　実際に保育をしましょう　31
　評価・改善　今日の保育を振り返りましょう　33

第3章　みんなで高め合う園内研修

Ⅰ　園内研修とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
Ⅱ　園内研修をやってみよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
　1　有意義な園内研修にしていくために　37
　2　園内研修の進め方　39
　（１）基本的な進め方　（２）園内研修のいろいろ

様式

○指導計画（日案）の概要　○２歳児・５歳児指導案（日案）例　52
○週日案記載例　60

プロローグ

保育をより楽しむために・・・

～保育の質を向上させるための園内研修～

こんなこと、園でありませんか？

○子どものことや保護者支援などについて、全職員でもっと話をしたいけれど、保育業務や勤務の実態から、なかなか話し合う時間がとれない。

○園内研修の重要性は分かっているけれど、準備が大変そうで、どこから手をつけたらいいのか分からない。

○話し合いはしているのだけれど、いつも出し合い話で終わってしまう。

○園内研修は計画的に行っているけれど、マンネリ化してしまっている。

○要領・指針を読んだけれど、実践にどう生かせばいいのか分からない。

★このような課題は、チーム（組織）で園内研修を行うことで少しずつ克服できます。また、多様な視点をもつことができ、日々の保育が、新たな発見のある生き生きとしたものになります。

★高知県教育委員会事務局幼保支援課のアドバイザーや指導主事がお伺いさせていただき、園の実態に応じた園内研修の在り方を一緒に考えることもできます。

第１章

乳幼児の遊びと保育者の役割

Ⅰ　乳幼児にとっての遊びとは

1　幼児教育において育みたい資質・能力

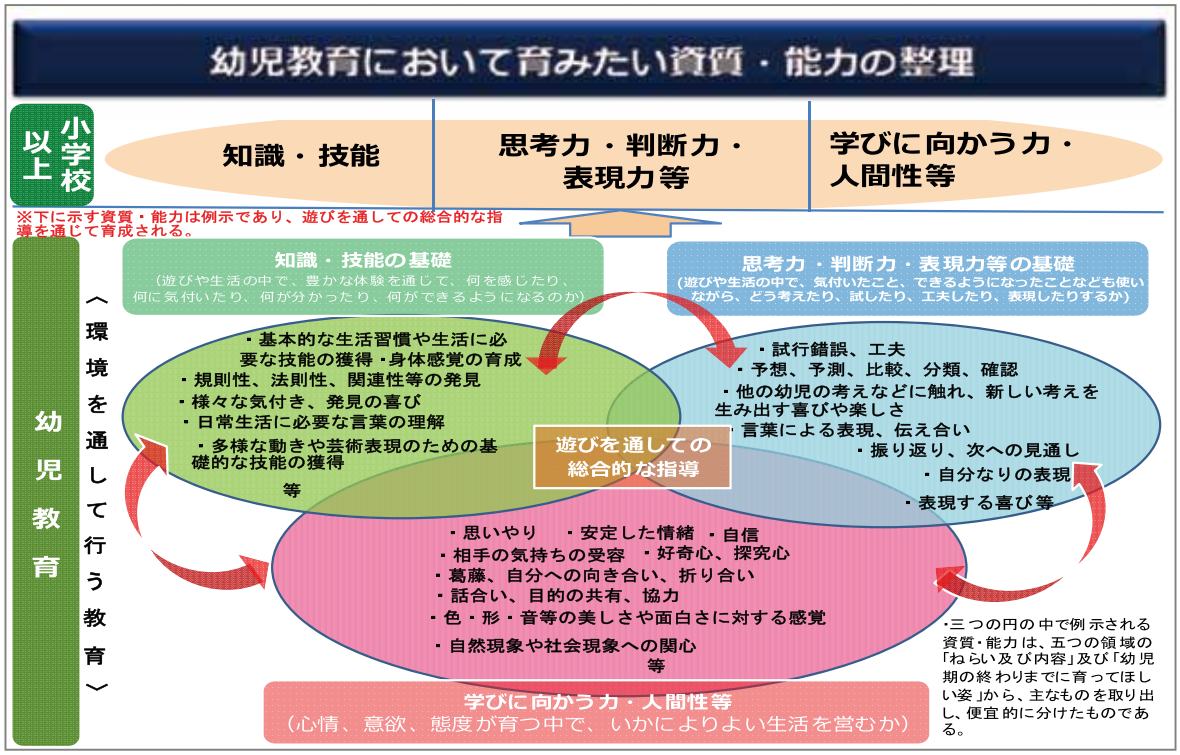
中央教育審議会教育課程部会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成 28 年 12 月 21 日）に、これからの学校教育改革の方向性が示されました。この趣旨を受けて、幼児教育においては、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のいずれも、幼児教育の基本は**「遊びを通しての総合的な指導」**であることを確認し、**幼児期において育みたい資質・能力**や、**「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」**を共通に示しています。

幼児期における遊びの中で学ぶ体験は、子どもたちにとって生きる世界を知る喜びの体験であり、まさに学校教育において育成すべき資質・能力につながる体験です。

では、幼児教育において育みたい資質・能力を確認しておきましょう。

資質・能力は、小学校以上の教育では、教科などの教育を通して育まれますが、幼児教育では、幼児期の特性から、遊びを通しての総合的な指導の中で、感性を働かせて身の回りの環境のよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたりして、できるようになったことを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育まれます。【図１】

【図１】



中央教育審議会（第 109 回）配付資料（Ｈ28.12.21）

これらの資質・能力は、これまでの幼稚園教育要領等の 5 領域の枠組みにおいても育んできたものであり、5 領域のねらいや内容について、子どもの発達や生活に沿ってバランスよく組織しながら指導計画を立て、遊びを通しての総合的な指導を展開することは、これまで通りです。

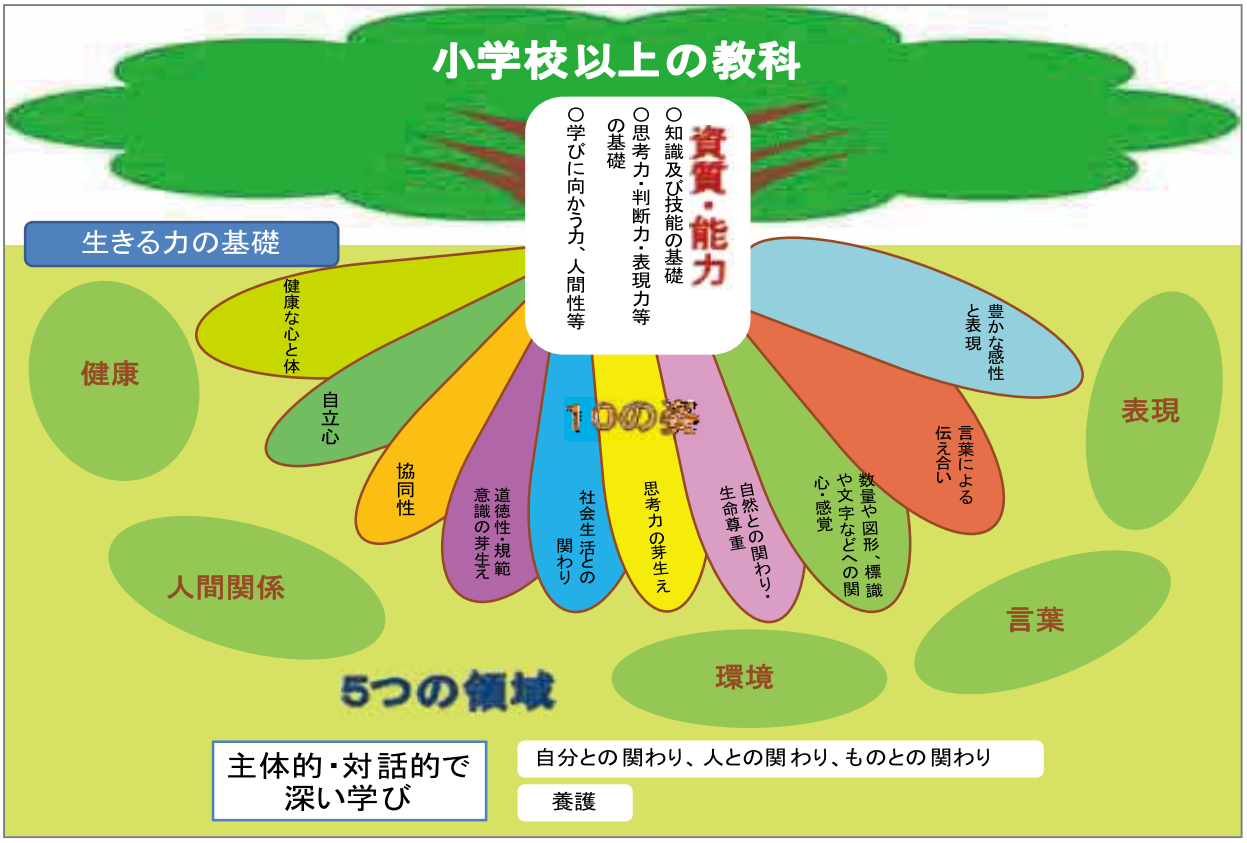
むしろ、確実に子どもの力（資質・能力）となっていくためには、「遊びの中での学び」を保育者が読み取り、その子どもなりの学びをより広げたり深めたりしていくことが必要であり、遊びを通しての総合的な指導の結果、子どもの中に資質・能力が育つことが、これまで以上に期待されています。

このようなことから、資質・能力を育むためには、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの指導の改善を重ねることが不可欠であり、子どもの育ちつつある力（資質・能力）を具体的に読み取りながら、必要に応じて全体的な計画や教育課程の実施状況を把握し、指導過程を見直す、「カリキュラム・マネジメント」を実現していくことが必要になります。

（保育所保育指針解説 P60、幼稚園教育要領解説 P50、
幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 P48（以下「解説」と表示）参照）

また、幼児教育における評価は、子ども一人一人のよさや可能性を捉えていくことを基本とします。そして、5 歳修了時には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた視点を加えることが必要となります。【図２】

【図２】幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と育みたい資質・能力



2　乳幼児期の遊びは学び

子どもたちはただやみくもに遊んでいるのではなく、遊びの中で人、モノ、コト、自然と関わり、様々なことを感じ考えています。例えば、砂場でトンネルのある山を作ろうとするとき、「黒い砂で山を作ろう」と言う姿があります。きっと、白っぽい砂で山を作りトンネルを掘ったらすぐに崩れ、トンネルができなかったという経験があるのでしょう。つまり、子どもたちは、山やトンネルを作る経験を繰り返す中で、黒っぽい砂は湿っていて固めやすくトンネルが作れることを感じ取り、**言葉で説明することはできなくても知っている**のです。子どもたちの「山を作りたい」という思い、「トンネルを掘っても崩れない山作り」へ挑戦する意欲に加え、これまでの経験に培われた知恵や感覚などが一体となって発揮され、「黒い砂で山を作る」と考えるに至っています。その意味で、遊びは学びなのです。

保育所保育指針　第1章　総則　1　(3)保育の方法　オ　　(解説:P23)

子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。

保育所保育指針解説

遊びは、それ自体が目的となっている活動であり、遊びにおいては、何よりも「今」を十分に楽しむことが重要である。子どもは時が経つのも忘れ、心や体を動かして夢中になって遊び、充実感を味わう。そうした遊びの経験における満足感や達成感、時には疑問や葛藤が、更に自発的に身の回りの環境に関わろうとする意欲や態度の源となる。

幼稚園教育要領　第1章　第1節　幼稚園教育の基本　2　(解説:P26)【認解説:P27】

幼児の自発的な活動としての遊びは，心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して，遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。

幼稚園教育要領解説　(P35)　【認解説:P36】

自発的な活動としての遊びにおいて，幼児は心身全体を働かせ，様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で，自発的な活動としての遊びは，幼児期特有の学習なのである。したがって，幼稚園における教育は，遊びを通しての指導を中心に行うことが重要である。

こうした遊びの重要性は、幼稚園の創設者 F.フレーベル以来一貫して主張し続けられていることです。保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても上記のように示されており、乳幼児期にふさわしい生活の中心に遊びがあり、遊びを通して子どもは育っていきます。したがってその育ちを支え促すために、保育者は遊びを通して指導することになるのです。

3　遊びを通しての総合的な指導

保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領で「遊びを通しての総合的な指導」が提示されている理由の一つは、**乳幼児の発達の特徴に沿って行うという考えによるもの**です。乳幼児期は、心身の諸機能の発達が未分化であり、それらが相互に関連し合い、**総合的に発達するという特徴を捉えて指導しなければならない**からです。もう一つには、**遊びや生活が本来総合的である**からです。「鬼ごっこ」を例に考えてみましょう。

鬼ごっこは走る活動だけではありません。確かに鬼ごっこをするためには、ある程度自ら走ることをコントロールできなければなりませんが、そうした力を身に付けるために子どもたちは鬼ごっこを楽しんでいるわけではないからです。「追う⇔逃げる」ことのスリル、緊張感を味わい、かつ逃げられる、捕まえられることが楽しくてするのでしょう。そして鬼ごっこを繰り返し楽しむ中で、子どもは走ったり、止まったり、フェイントをかけて動いたりできるようになるのです。

またルールについても、はじめからすべてを理解しているというよりは、遊びながら考え覚えていくものです。子ども同士でルールが共有されていないと、思いの行き違いから鬼ごっこが中断したり、トラブルになったりすることがありますが、一緒に遊ぶ中でルールのよさや守ることの大切さを知っていきます。鬼ごっこを楽しく続けたいから、ルールを守って遊ぶのではないでしょうか。

このように鬼ごっこを通して、子どもたちは友達と一緒に遊ぶ楽しさを実感しながら、身体諸機能の調和的な発達やルールの理解、社会性などを身に付けていくのです。その意味で、遊びは総合的なのです。

総合的に発達を遂げていくのは、子どもたちの様々な能力が一つの活動の中で関連して同時に発揮され、また、様々な側面の発達が促されていくための諸体験が、一つの活動の中で同時に得られていくからです。

では、遊びを通した総合的な指導とはどのようなものでしょうか。次の場面からも考えてみましょう。

【ピザ屋さんごっこの場面から（5 歳児）】

どのような経験をしているでしょう。例えば・・・

本物らしさにこだわること

イメージを出しながら、遊びに必要な物を作って楽しむこと

今までの経験を生かして作り上げていくこと

互いのよさを認め合って遊びを進めていくこと

友達と同じ目的をもって遊びを進めていくこと

自分の思いや考えを言葉や動きで表現していくこと

仲間とのつながりを感じること

イメージを出し合いながら、自分たちで遊びを進めていくこと

資質・能力を育むために、5 領域や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえて考えてみましょう。

Ⅱ　保育者の役割

１　子ども理解

（１）子どもを肯定的に見る

保育所や幼稚園、認定こども園等での保育は、**一人一人の子どもが保育者や多くの子どもたちとの集団生活の中で、周囲の環境と関わり、発達に必要な経験を自ら得ていけるように援助する営み**です。そのために保育者は子どもたちが自ら環境と関わり、発達に必要な経験を得られるよう援助していくことが求められます。保育者は、一人一人の子どもが今何に興味があり、何を感じているのか、何にチャレンジしようとしているのかを捉え、そうした経験が得られるように環境を構成したり、援助をしたりしていかなければなりません。つまり**、『子どもをどう理解するのか』が、保育の出発点であり、そこから保育が始まる**のです。

また、子どもたちの行動は、保育者の見方や接し方で大きく変わってきます。子どもがよりよい方向に伸びてほしいという願いから、つい保育者の目がその子どもの問題点ばかりに向けられてしまうことはないでしょうか。子どもたちは周囲の人に自分がどう見られているかを敏感に感じ取ります。自分に好意をもって温かい目で見守ってくれる保育者との生活では安心して自分らしい動きができ、様々な物事への興味や関心が広がり、自分から何かをやろうとする意欲や活力も高まってきます。

このようなことから、保育者が**一人一人の子どもを肯定的に見て、そのよさや可能性を捉えようとすること**が、子どもの望ましい発達を促す保育をつくり出すために必要となるのです。

次の事例から、考えてみましょう。

■事例１　走ってはだめ（４歳児）

６月初旬のある朝、４歳のＫ児が靴を脱ぐのももどかしそうに、遊戯室めがけて廊下を走り込んできた。Ｃ保育者は思わず「危ない！走ってはだめ！」と強い口調で叱りつけた。 同じ場面を見た担任のＭ保育者の反応は少し違っていた。「Ｋちゃん張り切ってるね」と声を掛けながら抱き止めた。そして、「お部屋から、飛び出してくる子がいると、ぶつかるよ、走らずに行こうね」と言って聞かせている。Ｋ児はしっかりとうなずいて、ニコニコしながら遊戯室に入っていった。

この事例から、Ｃ保育者とＭ保育者とのＫ児の受け止め方の違いが、Ｋ児の行動に対する違った働きかけとなって現れていることが読み取れると思います。

・Ｃ保育者の目→走ってはいけない廊下を走っている子ども
・Ｍ保育者の目→「○○をしよう」と張り切って登園してきた子ども

このように、**同じ子どもの行動でも、保育者の見方によって、その姿は違ったものになり、違った保育者の関わり方となって現れてくる**のです。

危ないこと、やってはいけないことなど、子どもの生活の中には、状況に応じて指導しなければならないことがあります。しかし、そのような指導が子どもの心に届いて、必要なこととして子どもが身に付けていくためには、保育者が発達しつつあるものとして子どもの姿を受け止め、温かい関わり方をすることが何よりも大切なことです。

【肯定的に見るためには】

・様々な子どもの姿を発達していく姿として捉える。
・その子どもの持ち味を見付けて大切にする。
・その子どもの視点に立つ。

見るとは、目に映ることを、ただ漠然と受動的に見るのではなく、映ったものを意識して能動的に見ること

これらのことはどれも、保育者が一人一人の**子どもに対する見方を変えようとする、日々の積み重ねの中で可能**になることと言えるでしょう。

（２）活動の意味を理解する

子どもたちの活動は、その時々の思いやそれまでにあった気持ちなどの内的なものが反映されて現れているものです。保育者から見れば何気ない活動が、その子にとっては大きな意味があったということはよくあります。

大切なことは、保育者の解釈が正しいかどうかではなく、**子どもの活動を肯定的に捉え受け止めて、心の動きを理解しようとする姿勢**です。その姿勢を積み重ね、関わっていくことが、**子どもと保育者との信頼関係を築いていく**ことになります。

「活動」とは・・・

子どもが環境に関わって自ら展開するものです。
どのような活動を子どもに与えるかではなく、『子ども自身が活動を生み出して展開する過程で得る様々な経験を大切にしたい』という思いが込められています。

（３）発達する姿を捉え、見通す

子どもの活動の意味を理解していくことは、同時に一人一人の子どもの発達する姿を捉えていくことになります。さらには、その活動を通して子どもたちが、発達に必要な経験を得ているかどうかを考えることになり、それが環境の構成や保育者自らの関わりの方向性を決めることになります。

子どもが成長していく姿には、共通した過程をたどっていくことが知られています。しかし、実際に存在するのは、Ａ、Ｂという一人一人の子どもであり、「○歳児」という一般的な姿で捉えていくわけではありません。また、一人一人の子どもは、それぞれの家庭環境、生活経験も異なっており、発達のたどり方は一様ではないのです。したがって、保育者は「Ａちゃんがどう育っているのか」「Ｂくんは…」というように、一人一人の子どもの育ちを捉えていかなければならない

のです。例え、**同じ遊びをしていても、子どもにとっての意味やイメージなどは違うことに留意し、その子どもに応じて関わることが大切**です。

さらに発達課題についても、保育所保育指針や幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に述べられているように、その時期の一般的な発達の姿から捉える課題ではなく、**一人一人の発達の姿から見いだされる一人一人の課題**です。保育者は子ども一人一人の発達の特性と課題を把握し、その子どもらしさを損なわないように指導することが大切です。

保育所保育指針　第1章　総則　1　保育所保育に関する基本原則

（3）保育の方法　ア　　（解説：P20）

一人一人の子どもの状況や家庭及び地域社会での生活の実態を把握するとともに、子どもが安心感と信頼感をもって活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること。

保育所保育指針解説　（P21）

保育に当たっては、一人一人の子どもの主体性を尊重し、子どもの自己肯定感が育まれるよう対応していくことが重要である。

幼稚園教育要領　第1章　第1節　幼稚園教育の基本　　（解説：P36）【認解説：P37】

3　幼稚園教育の基本に関連して重視する事項

（3）一人一人の発達の特性に応じた指導

①一人一人の発達の特性

②一人一人に応じることの意味

③一人一人に応じるための教師の基本姿勢

保育者には、子ども一人一人のこれまでの育ちと（過去）、今の置かれている状況（現在）、これからの見通しやこう育ってほしい願い（未来）を捉え、関わっていくことが求められているのです。

2　環境構成

（１）環境を通して行う教育・保育

保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、乳幼児期の発達の特性から「環境を通して行う教育及び保育」ということが就学前の教育・保育の在り方として示されています。

乳幼児期は知識や技能を一方的に教えられ身に付けていく時期ではなく、自分の興味や関心に基づいた直接的・具体的な体験を通して自ら成長していく時期です。また、乳幼児期は、好奇心旺盛であり、探究心も強く、面白そうなことがあればすぐに行動し、たとえうまくいかなくてもまた挑戦していくなど、活力あふれる時期なのです。こうした特性が最も具現化されているのはいうまでもなく「遊び」です。この遊びを通して、子どもの育ちを支えていこうとする営みが「環境を通しての教育・保育」なのです。したがって、園生活の中では、子どもが自ら興味や関心をもって遊び、成長に必要な経験が得られるように環境をつくり出していかなければなりません。そのために、**保育者は子どもをよく見て、理解し、子どもの育ちに応じた環境を構成することが大切**です。**子どもが育つことへの願いを環境の中に組み入れて、教育・保育する**のです。

保育所保育指針　第1章　総則　1　(4)保育の環境　　（解説:P24）
幼稚園教育要領　第1章　総説　第1節　4　計画的な環境の構成　　（解説:P41）
幼保連携型認定こども園教育･保育要領　第1章　総則　第1節　1　(5)計画的な環境の構成
（解説:P41）

環境を通して行う教育・保育とは、ただ環境を用意して好きに遊ばせるだけでもなく、保育者がいわゆる仕掛人となって盛り上げ、保育者の思うような環境に子どもを追い込んで活動させるということでもありません。保育者は、子どもを見て、**子どもが生み出す活動を受け止め共感し、助言し、時には環境を再構成しながら方向付けるなど、状況に応じた関わり**が求められます。

このように、環境を通して行う教育・保育は、保育者の一方的な働きかけでも、子どもに活動を任せるだけのものでもなく、保育者の意図と子どもの主体性をバランスよく絡み合わせる営みなのです。

（２）子どもの興味・関心を生かして

子どもたちの自発的な活動としての遊びが進められていくきっかけは、子どもが周りの環境に抱く興味・関心です【図 3】。したがって、保育者は、子どもの姿から、何に興味があるのか、何に取り組もうとしているのか、逆に何につまずいているのかなどを探り、**子どもが興味をもつような環境を用意することが大切**です。また時には、子どもの活動が保育者の予想を超え、新たな展開となることがありますが、いずれの場合も、**保育者は発達に必要な経験が得られるように関わっていくこと**が求められています。

このとき、子どもたちに危険なことがないように気を付けなければなりませんが、その際、ただ禁止するのではなく、その理由や保育者の考えを子どもに分かるように伝えることが大切です。

【図3】発達や学びの連続性の中で子どもの学びを捉える

関わる	考える	試す	分かる	工夫する
興味・関心	課題発見 思考力	探究心 観察力	達成感 成就感	向上心 次への意欲
あれ？ おもしろそう	なぜだろう? 不思議だな？	どうしてかな？ やってみよう	できた！ やっぱり！	もっとこうしたい 次はこうしよう

筒を横にして、水を流す→縦にして水を入れるとどうなるだろう。

どういう方法で水を入れよう。（カップ、バケツ、ペットボトル）

カップ→水がたまらない。
バケツ→水がうまく筒に入らない。重い。

ペットボトル→水をこぼさず入れることができる。

新たな課題

水が筒の下から漏れてしまう。

筒の周りを砂で囲い、水が漏れないようにする。水を数回入れる。

筒を振って音を確かめる。音がする。筒を倒して、水が一気に出る。

明日は、もっと水をためたい。

幼児の姿から、活動の意味を捉える

・自分で考え行動している。・友達と一緒に活動する楽しさを味わっている。【人間関係】
・ものの性質や仕組みについて興味や関心をもっている。（かさ・深さ）【環境】
・自分の気持ちを言葉で伝えようとしている。【言葉】

保育者のねらい

・一人一人のイメージや思いを大切にしたい。
・友達と関わる中でイメージを広げて、遊びを発展させていきたい。
・友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じてほしい。

明日の保育

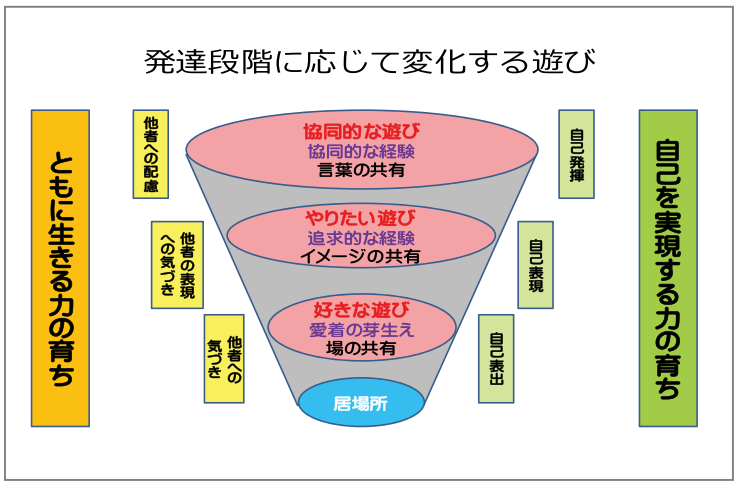
・具体的なねらい
・環境構成
・保育者の援助

【砂場遊びの様子】

（３）状況をつくること

子どもの活動は自然に生まれるわけではなく、**周囲の環境に刺激され、子どもの内面から興味や関心がわき出ることにより生まれます。**そして、環境との相互作用が深まることによって子どもの活動はさらに展開をしていきます。それゆえ、子どもの興味や関心が引き出され、**子どもが思わず関わりたくなるような状況**をつくり、自ら次々と活動を展開していくことができるように、配慮され、構成された環境が必要なのです。子どもたちが与えられた保育環境をただ使いこなすのではなく、**環境の中の様々な要素から、子どもたちが選び出し、組み合わせていくことが大切**ですので、子ども自身も環境を構成していくことができるよう、空間を柔軟に使えるようにしておきたいものです。こうした空間の視点から、**園舎、園庭、保育室、遊具、用具、素材、園内の自然など、園内の環境を捉え直すことが必要**でしょう。

また、子どもは園だけで生活しているのではありません。家庭や地域での生活も考慮し、**連続性のある生活を送ることができるよう、保育環境を考えることも大切**です。保育者は、子どもの育ちや生活の連続性などを踏まえ、様々な視点から環境を捉え、組み合わせ、活用していくという、環境の創り手としての役割が求められているのです。



文部科学省　幼児教育の改善・充実調査研究
「協同して遊ぶことに関する指導の在り方」より（Ｈ21）

3　心のよりどころ

（１）子どもと保育者との信頼関係

教育･保育を進めていくに当たって､まず何よりも大切にしなければならない、**子どもと保育者との信頼関係**について考えてみたいと思います｡乳幼児期においては、自分が周りの大人から認められ、守られているという安心感から情緒が安定し、それを支えとして自らの世界を広げ、成長していきます。保育者が子どもの心のよりどころになるためには、**ありのままをまるごと受け止め、その子どものよさや、興味・関心を探っていくことが大切**です。そのうえで、安心して遊ぶことができる環境を用意したり、その子どもの世界に保育者として参加したり、一緒に遊んだりして、様々な関わりを考え、実践していきます。保育者が子どもの気持ちを受け止め､その子どもにとって必要な関わりをすることから信頼関係ができるのです。そのためには、**子どもの姿と自らの関わりを振り返っていくこと、すなわち省察することが必要**なのです。

さらには、その子どもと保育者との関係が二者の中に閉ざされたものとならないよう、他の**子どもたちとの関係づくりへと、援助の方向性を見いだしていきたい**ものです。友達とともに生活することの楽しさを実感として伝え、味わえるようにしていきましょう。あせらずに、じっくり、丁寧にということが大切ではないでしょうか。思い通りにならなかったり、うまくいかなかったりしても、その思いを受け止め共感してもらうことで､もう一度やってみようとする意欲が生まれます｡このように、**自分が愛され、大切にされることによって、人への信頼感が育つとともに、自己肯定感が生まれる**のです。ですから、子どもにとって、初めて出会う他者としての保育者が心のよりどころであることはとても重要です｡子どもと保育者の**信頼関係が子どもの育ちを支える基盤**となるのです。

信頼関係は一人一人の子どもと培っていくものであり､日々の関わりの積み重ねの結果として得られるものであることから､一朝一夕にできるものではありません。

（２）保育者同士の関係づくり

こうした保育者の姿勢は「言うは易く行うは難し」です。どんな保育者であれ、いわゆるオールマイティではなく、悩み、失敗し、傷つき、時には「私って？」と自信をなくすこともあるでしょう。その悩みなどを聞いてもらい、受け止めてくれる他者が、保育者にも必要です。その意味では、子どもと保育者との関係づくりのプロセスには、保育者同士の関係づくりにもあてはまるかもしれません。自分だけで問題を抱え込まないよう、園長先生や主任、他の保育者に相談し、共に考え話し合い、その方向性を見いだしていくことが求められているのです。

4　受容的、応答的な保育

「乳児保育」については、その発達の特徴を踏まえて、温かく応答的な保育を行う必要性について以下のように示されています。

保育所保育指針　第2章　保育の内容　1　乳児保育に関わるねらい及び内容
（1）基本的事項　（解説：P89）
幼保連携型認定こども園教育・保育要領　第2章　ねらい及び内容並びに配慮事項
1　乳児期の園児の保育に関するねらい及び内容　1　基本的事項　（解説：P159）

ア　乳児期の発達については、視覚、聴覚などの感覚や、座る、はう、歩くなどの運動機能が著しく発達し、特定の大人との応答的な関わりを通じて、情緒的な絆が形成されるといった特徴がある。これらの発達の特徴を踏まえて、乳児保育は、愛情豊かに、応答的に行われることが特に必要である。

「受容的、応答的な保育」とは、どのようなものでしょうか。

保育者による「受容的、応答的な保育」は、子どもの育ちにとって最も大事な「そこで生きていることが安心」という感情を与え、生涯にわたって人との関わりの中で**生きていく力の基盤**となるものです。

「受容的」というのは、子どものあるがままを受け止め、受け入れて容認することです。そして、**「応答的」**という言葉が、相手の求めに的確に応えるという意味だとすると、保育者が子どもに対してすぐに何かをしてあげることだけではありません。子どもの声や表情、体の動きなどから、子どもの欲求を汲み取り、子どもがそっとしておいてほしいときに声をかけずにいるということも、タイミングを捉えて応えていくことも、応答的だと言えます。

子どもの「助けてほしい」「一緒にやってほしい」「○○を使いたい」「○○ちゃんと一緒にいたい」などは、子どもの願いや要求ですが、「今は近くで見ていてほしい」「集中できないから話しかけないでほしい」なども、子どもの願いや要求だと言えます。その**子どもの内面をできるだけ的確につかみ、それに応じることが「応答」**です。

このように、自分の気持ちを汲み取って、それを言葉にして返してもらう応答的な関わりの中で、子どもは徐々に大人から自分に向けられた気持ちや簡単な言葉が分かるようになるのです。

また、乳児保育において「安心」を保障するためには、**特定の大人との関わり**が大切になります。現場では、「ゆるやかな担当制」という表現が使われるようですが、特定の保育者がその子の保育（特に生活面）にできるだけ一貫して関わる保育の方法です。ここで気を付けなければならないことは、ただ特定の保育者が関われば安心するというものでもありません。**だれがいつどのように関わっていくことが望ましいかを、日々の子どもの姿から探っていくことが大切**になります。

第２章

保育の計画

Ⅰ　保育の計画から評価まで

１　「全体的な計画」「教育課程」とは

園生活は、遊びを中心として展開されます。遊びは自由性をもち、その時々の状況によって多様になり複雑で変化に富んでいます。子ども自身の興味や関心、あるいはイメージがその原動力であり、それが明確であればあるほど、子どもは遊びに集中して取り組みます。一人で遊ぶこともあれば、友達と一緒に遊ぶこともあります。そのプロセスには、楽しさや充実感、達成感ばかりでなく、混迷や葛藤、失敗も含んだ探索や試行の体験があります。このように、子どもたちは遊びを通して、人格形成の基礎となる様々な経験をしていきます。それゆえ、遊びを生み出していくためには、保育者の働きかけ、状況づくり、すなわち環境を構成するとともに、子どもの育ちや状況に合わせた援助が必要です。

一方園生活には、遊びだけではなく、食事、排泄や着替えなど基本的な生活のために必要な活動もあります。長時間保育・低年齢児保育の場合には、生命が保持され情緒が安定した生活をより保障していかなくてはなりません。このように園生活では、多様な活動の総体として、静と動（休息と活動）、緊張感と解放感、個と集団などが適度にバランスをもち、組み合わされた生活が大事になります。

このような生活を保障するためには、その具体的な生活の在り方を構想し、保育を計画することが必要不可欠です。しかもその営みは、子ども一人一人の成長を支えるという目的のもと、組織的に行われるものです。

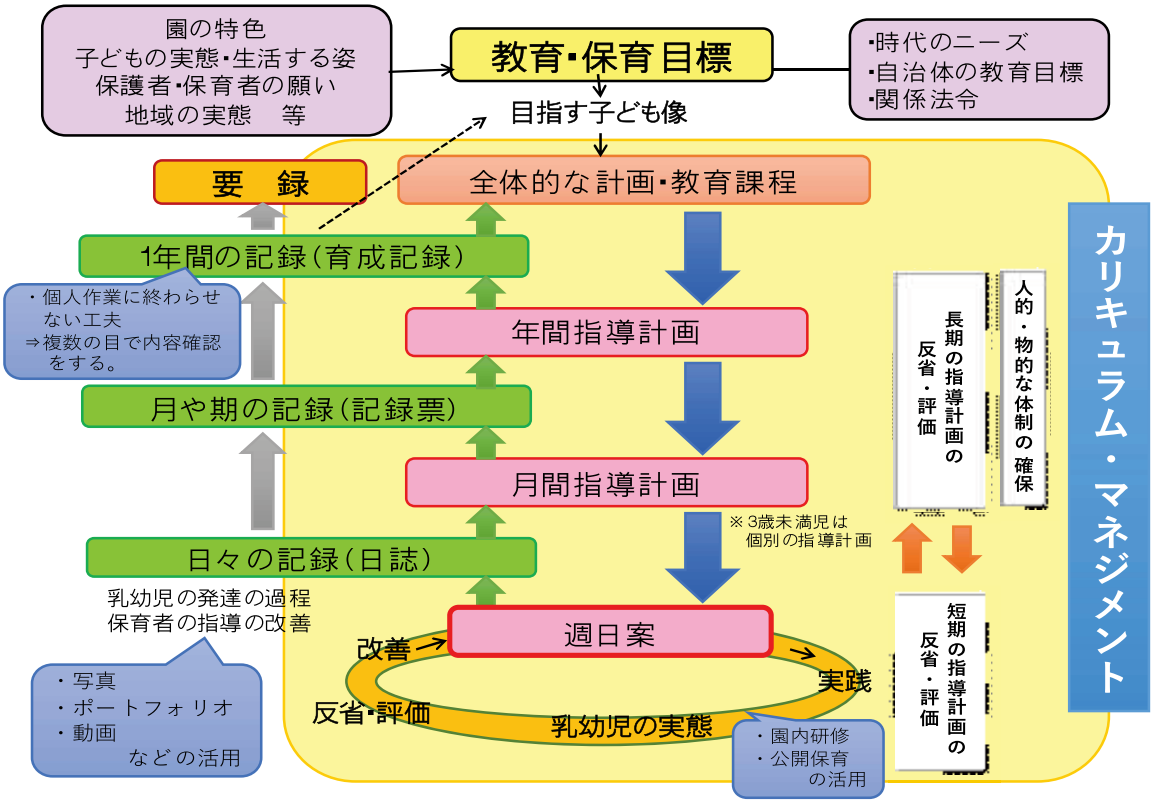
その最も根幹となるものが、保育所や幼保連携型認定こども園の**「全体的な計画」**と幼稚園における**「教育課程」**です。全体的な計画や教育課程は、園の目標に向かい、入所・入園から卒所・卒園までの期間にわたって、どのような道筋をたどって教育・保育を進めていくのかを明らかにするものです。子ども一人一人が園生活という道を歩んでいくなかで、**様々な体験を通して成長していくための大きな道筋**を示したものと言えるでしょう。

保育所や幼保連携型認定こども園においては、子どもの在園時間における教育・保育の内容は、「全体的な計画」に全てが含まれることになります。

幼稚園の場合、学校教育法によって教育課程を編成することが義務付けられており、「教育課程」は教育内容に関する事柄について編成するものです。預かり保育や子育ての支援等は、「教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動」と規定されているため、教育課程には含むことができないのです。しかし近年、幼稚園において、預かり保育を受ける人数が増えてくると、教育課程に基づく活動と預かり保育の内容の関係を考えて保育を組み立てる必要が生まれました。すなわち、子どもにとって園生活がスムーズな流れとなるように、教育課程に基づく教育活動と預かり保育や子育ての支援を一体的に運営することが求められ、今回の幼稚園教育要領の改訂で、新しく「全体的な計画」が示されたのです。これによって、保育所や幼保連携型認定こども園の「全体的な計画」と幼稚園における「全体的な計画」は少し異なるように見えますが、園の教育・保育の大きな道筋・全体像を示すものという点では同じものと言えます。

保育所や幼保連携型認定こども園における「全体的な計画」も、幼稚園における「教育課程」及び「全体的な計画」も、その園や子ども、地域の実態等を踏まえ、全教職員の協力の下で、園長が責任をもって編成（作成）する必要があります。

保育所保育指針　第1章　総則　3（1）全体的な計画の作成　（解説：P39～42）
幼稚園教育要領　第1章　総説　第3節　3（1）教育課程の編成　（解説：P79～83）
幼保連携型認定こども園教育・保育要領　第1章　総則　第2節　1（3）「教育及び保育の内容並びに子育ての支援等に関する全体的な計画」の作成上の基本的事項　（解説：P74～79）



2　指導計画とは

全体的な計画や教育課程は、入所・入園から卒所・卒園までを見通した全体的な計画であるため、実践するためには、より具体的な計画が必要です。この計画が、指導計画です。

指導計画は全体的な計画や教育課程に基づき、それぞれの時期の予想される子どもの姿、ねらいと内容、環境構成、援助を明らかにしたものです。指導計画には、大別すると、年（期）、月などを単位として作成される**「長期の指導計画」**と、週や一日の計画である**「短期の指導計画」**とに分けられます。

（１）長期の指導計画（年・期・月）

長期の指導計画は、園の全体的な計画や教育課程を基に、乳幼児の生活を長期に見通しながら、具体的な園生活の内容や指導の在り方を大筋で示したものです。

年間指導計画は、４月からの一年間の子どもの育ちを見通して、具体的なねらいや内容、環境構成、援助などを記載して作成したものです。

①年間指導計画作成のポイント

【昨年度の年間指導計画の評価から】

全体的な計画・教育課程における発達の過程、ねらい・内容などを、実際の園生活の流れに即した姿として具体的に捉え直します。作成は前年度末に、全体的な計画・教育課程、昨年度の年間指導計画の評価をもとに、来年度の園生活をプランニングしていきます。ですから、来年度の年間指導計画は、本年度の子どもの姿、保育の記録や評価を基に作成されます。一方、長期的な見通しが必要とされる自然との関わり、地域の特性、行事の位置付け、家庭との連携、小学校との連携・接続などについては【表１】のようなことを考慮します。

【表１】

自然との関わり	・園内自然環境を整える　・生き物の採集や飼育、植物の栽培は？ ・自然物を使っての遊びは？　・園外保育は？　など
行事の位置付け	・慣例的に同じ時期に同じ方法で繰り返されていないか ・子どもに無理はないか　・行事中心になっていないか　など
地域の特性	・利用可能な公共施設　・他施設との交流 ・地域の自然、行事、伝承文化　など
家庭との連携	・保護者会、クラス会　・保育参観、保育参加 ・家庭訪問、個別懇談　・園便り、クラスだより　など
小学校との連携・接続	・小学校との交流活動、相互訪問　・保育・授業公開 ・行事などの合同開催　・教職員の連絡会　・一日保育者体験　など

②月間指導計画作成のポイント

月間指導計画は、年間の計画の細案として、月ごとに作成されるものです。

作成のポイントは上述した通りですが、クラスの子どもの実態の把握から始まります。年間指導計画をもとに、今の子どもの生活する姿を把握し、季節の変化や行事等に応じて、その月の園生活の様子を予想し、具体的なねらいと内容、保育者の援助の在り方などについて計画します。したがってこの計画では、前月の子どもたちの姿（保育の評価）から、「今月のねらい」を立て、その内容を考え、それを実践化するための環境構成と保育者の援助を考えて作成することになります。

【３歳未満児の指導計画について】

保育所保育指針　第1章　総則　3(2)指導計画の作成　イ(ア)（解説:P43）
幼保連携型認定こども園教育･保育要領　第1章　総則　第3節
4　指導計画作成上の特に配慮すべき事項（解説:P136～138）

（２）短期の指導計画（週・日）

短期の指導計画は、週などの生活の区切りを単位とした週案と、１日を単位とする日案とに分けられます。それらは、各クラスの一人一人の生活に応じた計画であり、クラス担任が作成します。ただし乳幼児の生活する姿は多様で複雑であることからも、園内での話し合いや同僚の意見などを参考にすることも大切です。

①週案作成のポイント

週案は、乳幼児の実態を基に、一週間という単位で、子どもたちの生活や活動の流れを予想し、具体的な保育の展開を考えたものです。一週間の流れの中で、乳幼児が主体的に活動できるような場や空間をどう設定するのか、遊具、用具、素材などの物や人とどのように出会い関わるのか、そのために必要な時間や流れをどう保障するのかなどを考えます。

したがって週案は、前週の子どもの実態から、週のねらいと内容、環境構成、予想される子どもの姿、保育者の援助などについて予想し作成します。

②日案作成のポイント

日案は、一日の保育の予想であり、明日の保育をどうするのかという極めて具体的な指導計画です。前日の実践の反省・評価から乳幼児の実態を十分に捉え、一日の生活の流れに応じて、具体的なねらいと内容を考え、環境構成や援助の方法を明らかにしたものです。どのような活動や遊びが展開されていくのかを予想し、そのためにどのような環境を構成するのか、保育者はどう関わっていこうとするのかなどについて計画するものです。

実践の中では計画した通りに進むことばかりではありません。計画と実践にズレが生じることもあります。日案はあくまで計画であり仮説です。計画で大切なことは、実践の中で、

子どもたちの遊びに応じて絶えず修正されうるものであり、保育者には計画に対して、ねらいに基づき柔軟に対応していくことが求められているのです。

3　記録と評価

日々の保育を充実したものとするためには、**自らの実践を振り返ることが必要不可欠**です。保育者が、その日の保育の中での様々な出来事を思い出し、子どもの遊びやその行動の意味、自らの関わりなどについて考えます。その**振り返りや省察が、明日の保育へ、自らの資質の向上へとつながっていく**のです。

（1）記録

大切なことは、単なる感想を書くのではなく、**ねらいに基づいて子どもの姿やその理解に視点を置いて記録すること**です。なぜなら、自らの保育を文章に書き意識化することで、客観視することができるからです。記録に残されたことには、その保育者が子どもをどう見ているのか、その育ちをどう捉えているのか、自分が何を考えどのように関わったのかなどが反映されているので、それを自覚することになるのです。ですから、子どもの姿やその理解に視点を置いて保育を記録できるということは、実際の保育の場面で、その実態をよく捉えていたといえるかもしれません。

また、保育者は保育の記録を書くことを通して、自らの実践を評価していることになります。評価とは何らかの基準に照らし合わせて価値付けることと捉えられがちですが、保育においての評価は、子どもを他と比較して優劣をつけることでもありません。**保育における評価は、子ども一人一人を理解しようとすることと、自らの関わりを省察すること**なのです。

【事　例】

５歳児　４月下旬の記録から	行動の意味を理解する
５歳児がウサギ小屋でウサギの世話をしていた。３歳児がやってきて、すでに切り終わった野菜を包丁で切りたがる姿が見られた。５歳児はせっかくきれいに掃除したのに、散らかされて困っている様子であった。一本のニンジンを二人で取り合う姿が見られたので、ニンジンを半分に切って渡してやった。そのニンジンを切りたがる３歳児に「危ないから小さくしてあげるね」と切りやすくしていた。 ひどい抱き方をしている３歳児のことが気がかりで「だめ。そんなことをしたらかわいそう」と思いあまって注意していた。	**保育者は記録から、行動の意味を「主体的に環境に関わる」という育ちの方向性で理解するようにした。** ・ウサギの世話をすることに、５歳児としての誇りをもっている。 ・困ったことをする３歳児は嫌だけれど、３歳児のやりたい気持ちも理解している姿が見られる。 ・３歳児の取り合いする姿からどのようにしたらよいのか判断し行動している。 ・ウサギの立場に立って、してはいけないことを伝えるが、具体的な伝え方になっていない。
○５歳児は３歳児の行為に最初、困ったり戸惑ったりしていたが、３歳児の「ウサギにニンジンを食べさせたい」という思いを感じたことで、自分なりに解決できる方法を考えようとした。このことから、５歳児としての喜びや自覚をもっている姿と評価できるのではないか。 ○ウサギへの愛情をもって世話をしていた５歳児だからこそ、３歳児の思いを受け止め、見守る姿が見られたのではないだろうか。このことは、５歳児がウサギの扱い方を知らせるよい機会で、相手に分かるように言葉で伝えたり、具体的な方法を考えたりするなど、判断力や思考力を育てる機会になるだろう。	

（２）評価

子どもに対する評価は、その子にとって、その一日がどういう一日だったのか、その姿をどう理解するべきなのかを問い直してみることです。つまり、○○ができた、○○ができない、○○をした、○○をしないという目に見えた結果や変化を捉えるのではなく、子どもの気持ちの揺れや変化に目を向け、**行為の意味を探る**ことです。また、周りの友達との関係、その遊びの内容や生活との関係など、その状況を捉えていきましょう。そして、その背景を探り、**一人一人の子どもの今の発達の姿を理解**していきます。つまり、**子どもの理解から、これからの援助の方向性を見いだしていくことが大切**です。

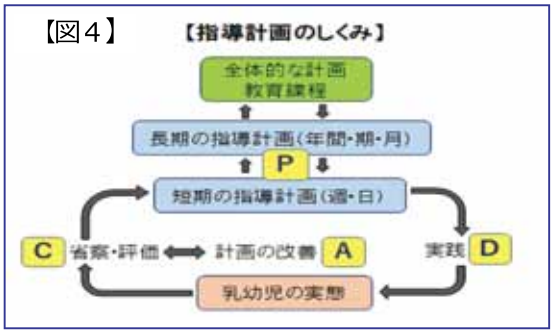
一方、**保育者自身に対する評価**は、指導計画の立て方やその実践に対して行われるものです。前者は、計画通りできたかどうかではなく、**計画と実践の関係性について考察**することです。例えば、計画作成の前提である子どもの育ちへの理解、実態把握が適切であったかどうか、ねらい・内容の設定、環境の構成、展開の予想などが、子どもにとって適切なものであったかどうかなどを問い直すものです。さらに自らの関わりが子どもにとってどうだったのかを検討します。ねらいが達成されたかどうかという結果だけではなく、実践のプロセスに目を向け、計画の立て方と実践を問い直すことが大切です。

こうした自己評価の一方、自らの実践について他者から受ける評価も大切です。他者からの評価は、自らの実践の是非が問われるものではなく、多様な視点から見つめ直すことによって、自らの実践を選択肢の一つとして考え、自らの実践力を高めていくアプローチです。独りよがりに陥らないために、多角的な視野から子ども、そして、自らを捉えていくためのものなのです。このプロセスは多くの場合、定期的な職員会議、園内研修などで話し合われています。そうした積み重ねが、一人の保育者にとどまらず、**保育者集団としての成長、保育の質の向上につながっていく**のです。

このように保育の評価を通して、保育者は新たな実践に向けた手かがりを得て、明日の計画作成へと向かっていきます。評価は新たな実践に向けてフィードバックしていくものであり、計画→実践→評価→改善→計画→実践…という **PDCA サイクルが保育の営み**なのです。

さらにはこうした日々の評価の積み重ねは、全体的な計画の改善へとつながっていきます。そのプロセスをまとめると【図４】のような流れになります。すなわち、日々の評価から、短期の指導計画の評価、長期の指導計画の評価へとつながり、そして全体的な計画・教育課程の評価に向かい、その改善がなされていくのです。

【図４】　【指導計画のしくみ】



このように、保育の評価は、単なる善し悪しを判断するものではなく、子どものよりよい成長を願って、その園の**保育という営みを改善していくため**の非常に重要なものなのです。

～保護者と共に～

幼児期の遊びを通して行う教育は、小学校以上の教科教育のような「見える教育」に対し、「見えにくい教育」と言われます。ですから、カリキュラムの考え方や実施と評価、改善の結果（ＰＤＣＡ）については、保護者などに丁寧に説明しながら理解と協力を得て、保護者とともに手を取り合って子どもたちを育んでいきたいものです。

【連絡帳やお便り等はわが子の成長記録】

保育所保育指針第４章（幼:第３章、認:第４章）に**「保育士等が保護者と連携して子どもの育ちを支える視点をもって、子どもの育ちを保護者とともに喜び合うことを重視する。保護者の養育する姿勢や力の発揮を支えるためにも、保護者自身の主体性、自己決定を尊重することが基本となる。」**と示されているように、保育者は親と子どもの関係に着目し、保護者の養育力を支え、子育てのパートナーとしての役割を担うことが求められています。これらのことからも、保護者と園をつなぐ連絡帳やお便り等は、一人一人の子どもの保護者と子どもの成長を見つめ合う「成長記録」であり、保護者と園をつなぐ架け橋とも言えるでしょう。

また、日々記録をしている連絡帳等は、「子どもの育ちを確かめ合うもの」であると同時に、「子育ての仕方が分からない。自信がない。不安だ」という保護者にとって、担任等に相談や質問が日常的に気軽にできるものでもあります。お便り等も、写真を使うなどの工夫をしながら、「子どもの育ち」や「保育者の関わり方や願い」を込めることで、子育ての「楽しさ」につながったり、子育ての仕方に「気付いてもらえる」機会にもなることでしょう。

このように、保護者への効果的な支援としていくために「書く」ことは、子どもの姿を「よく見る」ことにもつながり、保育者の専門性にもつながります。もし自分が保護者だったらどういう記述を「嬉しい」と感じるでしょうか。子どもたちの姿が浮かんでくるように具体的に書くことを意識し、ともに手を取り合って子どもたちを育んでいく記録にしていきましょう。

＊お便りの例
子どもたちの写真も使って、遊びの中で楽しんでいることや育ちつつある力、大人のよりよい関わりを、分かりやすく伝えています。

～環境の構成～

・草花を使った色水遊びの環境を、子どもたちの目に付きやすい各保育室の前につくっています。各年齢の子どもの興味・関心、ものとの関わり等の育ちを捉えたうえで、その季節ならではの素材や道具を整えています。

・色の変化に気付きやすく様々な探究を支える環境にするために、白や透明の道具を準備しています。

・同じ製作コーナーでも、幼児の育ちや他の遊びとの関係・距離を考えると、椅子がない方がよい時もあります。

・乳児保育において、一人一人が安心し、落ち着いた空間の中で楽しく食事をするために、食事の空間も工夫しましょう。
・食事をしやすい椅子の高さや背もたれなどを考えて構成しましょう。

・様々な形や大きさを工夫し、「自分で」「やってみたい」と思えるような環境を構成しましょう。

・子どもにとっての玩具は、乳児期から育ちつつある豊かな感性を養うものです。子どもの育ちや興味・関心に沿って、柔軟にアレンジしながら遊べる玩具は、子どもたちの想像力や思考力を育みます。

Ⅱ　明日の保育の計画

1　指導計画（日案）の作成の流れ

明日の保育の計画は、今日の子どもの姿（育ち）を捉えることからスタート！

明日の計画へ

計画1(P)
子どもの姿を
振り返り、理解する
★P23へジャンプ！

計画2(P)
ねらいと内容を
設定する
★P25へジャンプ！

計画3・4(P)
環境を構成し、
援助を考える
★P27へジャンプ！
★P29へジャンプ！

実践(D)
指導計画をもとに
保育を行う
★P31へジャンプ！

評価・改善(C・A)
保育の振り返りをする
★P33へジャンプ！

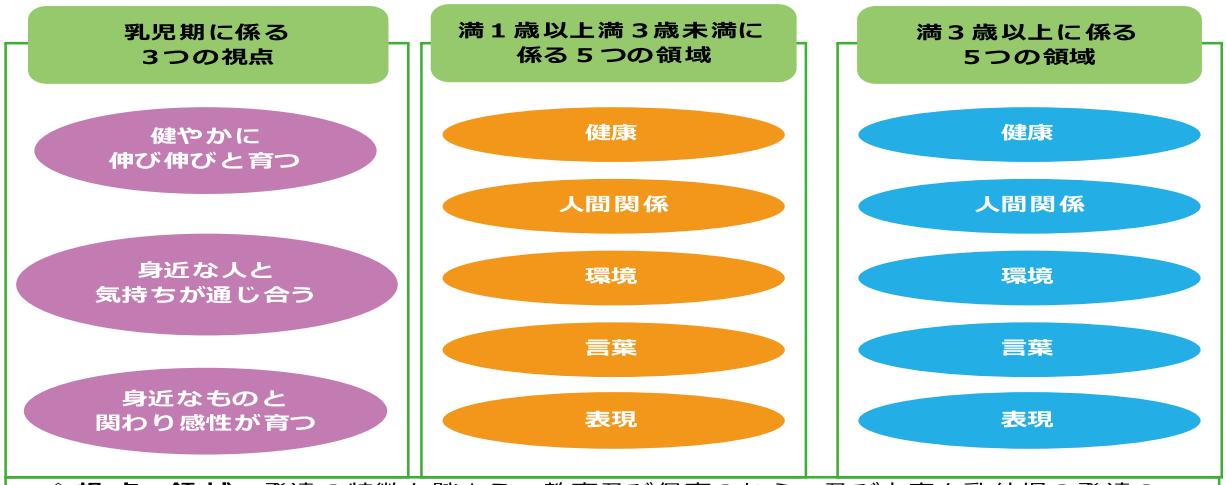
【指導計画の考え方】

★子どもたちの生活は日々連続しています。**生活の流れを大切にして、日案を作成**します。今日（あるいはこの頃）の子どもの姿から、一人一人の理解を深め、明日の子どもの姿を思い浮かべながら環境の構成や保育者の援助などを具体的に記入します。

★長期・短期の指導計画のどちらの指導計画を作成するときにも、**「幼児期に育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（Ｐ１～２）を念頭に置き**ながら、発達の時期にふさわしい生活が展開されるように作成することが大切です。

★指導計画の作成は、施設によって記載の仕方や提示の順序は異なりますが、保育者が子ども一人一人の発達過程や状況を踏まえ具体的に作成します。そして、その指導計画を念頭に置きながら、実情に即して柔軟に保育を行っていくことは、**保育所・幼稚園・認定こども園等のいずれの施設においても大変重要**なことです。

«乳幼児の発達の側面からまとめた視点と領域»



◇**視 点・領 域**→発達の特徴を踏まえ、教育及び保育のねらい及び内容を乳幼児の発達の側面からまとめたもの
◇**ね　ら　い**→教育及び保育において育みたい資質・能力を園児の生活する姿から捉えたもの
◇**内　　容**→ねらいを達成するために指導する事項
◇**内容の取扱い**→発達の特徴を踏まえた指導を行うに当たって留意すべき事項

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂について」より　平成29年７月　中央説明会分科会資料：内閣府子ども・子育て本部

2　指導計画（日案）の作成のポイント

計画１　子どもの姿を振り返り、記録しましょう

子どもたちの生活は、今日から明日に連続しています。明日の保育を組み立てるためには、今日の子どもの姿を振り返り、記録することから始まります。

子どもたちは、どこで、どんなふうに活動していたでしょう？

なぜそうしていたのか探ってみることにより、その子どもの興味や関心、欲求を捉えてみましょう。

そうすることで、子ども一人一人の個性や育ちが見えてきます。

ポイント１

肯定的な目で子ども一人一人を受け止め理解しましょう。子どもは、自分の思いや考えを言葉に出すとは限りません。保育の中で見られた子どもの表情や動きを思い浮かべ、内面を理解していきましょう。

ポイント2

子ども一人一人が、**環境（ものや人、事象など）とどのように関わっていたのかを理解**しましょう。そのためには、前頁で示した教育・保育の視点と領域から、子どもたちの育ちや課題点を捉えるのがよいでしょう。

次のような視点で子どもの姿を振り返り、記録していきましょう

★何を楽しんでいたのか。
★何に興味や関心をもっていたのか。
★こだわっていたこと、その意味は･･･
★何を実現しようとしていたのか。
★何を感じていたのか。
★戸惑っていたことやためらっていたことは･･･
★友達とどのような関わりが見られたか。
★自分（保育者）はどのように関わっていたのか。
　など、これ以外にもたくさんの視点があります。

４歳児６月○日（火）：記録の例

左ページの視点で子どもの姿を振り返り記録してみると（抜粋）

＜砂遊び１＞

Ａ、Ｂ、Ｃの３人は、スコップで砂を掘って、川を作っていた。そのうち、Ｃは、ペットボトルに水を汲んでは、川に流し始めた。

だんだんに水がたまってくるのを見たＡが、「海みたいや」と言ったことで、３人の遊びは海づくりに変わっていった。３人の楽しそうな声に気付いたＤは、「ぼくも入れて」と言って仲間に加わろうとしたが、Ａが、「いかん」とすぐに言った。Ｄは、入れてもらえなかったが、そばで３人の遊びを見ていた。保育者は、Ｄの気持ちを探るため、少し様子を見守ることにした。

Ａ、Ｂ、Ｃは、たまった水の感触が楽しくて、ぐちゃぐちゃになって遊んでいるうちに片付けになった。

＜砂遊び２＞

Ｅ、Ｆ、Ｇ、Ｈの４人は、砂場の横に置いているテーブルの上に、カップで型ぬきをしては、ケーキを作り、さら粉や小石などをのせていた。

いろいろなケーキが並んでいたので、保育者は、「食べてもいい？」と、４人に声をかけた。Ｅたちが、「いいよ。いちごケーキどうぞ」と差し出してくれたので、４人の顔を見ながら、「甘くておいしいね」と言って食べると、４人は、顔を見合わせてにっこり笑った。

＜保育室では＞

・・・・・・

記録した子どもの姿をまとめてみると（抜粋）

- 気の合う友達と同じ場所で一緒に遊びを楽しんでいる。
- 自分の考えを友達に伝えたり、同じイメージで遊んだりする姿も見られるが、それぞれが自分の遊びを楽しんでいる。
- 遊びの仲間入りをめぐっていざこざになることもある。
- 汚れも気にせず、砂や水・土の感触を楽しんでいる。

計画２　ねらいと内容を設定しましょう

計画で読み取った子どもの姿に保育者の願いを込めて、ねらい・内容を設定します。

ポイント１

どのような育ちを期待するのか、そのためにはどのような経験を重ねていくことが必要であるのかなど、**子どもの生活する姿から、具体的なねらい・内容を設定**しましょう。

ポイント２

長期の指導計画を基に、育ちの見通しをもって、ねらいがどのように達成されつつあるのかなどを捉え、明日のねらい・内容を考えていきましょう。

ね　ら　い

「ねらい」は、子どもが生活を通して発達していく姿を踏まえ、園において育みたい資質・能力を子どもの生活する姿から捉えたものです。

今日(あるいはこの頃) の子どもの姿から、子どもの内面に育ちつつあることに、保育者の願いを込めてねらいを設定します。

・ねらいは、様々な経験を積み重ね、しだいに身に付くものですので、同じようなねらいが数日続くこともあります。

内　　容

「内容」は、「ねらい」を達成するために、保育者が子どもの実情を踏まえながら指導し、子どもが身に付けていくことが望まれるものです。

子どもたちがどんな経験を積み重ねていくと、ねらいを達成していくことができるのだろうかというように、子どもの視点から考えて、具体的に設定します。

子どもたちが経験する内容は保育者の指導する内容でもあります。

・「〇〇遊び」という活動そのものが大事なのではなく、〇〇遊びを通して、心に刻まれていく内面的な経験にこそ意味があります。

例）『活動』→「〇〇遊び」

『経験』→「〇〇遊び」をしながら、友達と手をつなぐ喜びを感じる

４歳児　６月○日（第４週目）：ねらいと内容の例

今日の子どもの姿から、ねらいと内容を考えてみると・・・

子どもの姿

- 気の合う友達と同じ場所で一緒に遊びを楽しんでいる。
- 自分の考えを友達に伝えたり、同じイメージで遊んだりする姿も見られるが、それぞれが自分の遊びを楽しんでいる。
- 遊びの仲間入りをめぐっていざこざになることもある。
- 汚れも気にせず、砂や水・土の感触を楽しんでいる。

＜長期の指導計画を基に育ちを捉える＞

発達の過程

- 一緒に遊びたい友達や好きな遊びが見付かり、活発に遊ぶ姿が見られる。
- 自分が興味をもった遊びを思う存分楽しんでいる。
- 気の合う友達と遊ぶことが楽しくて誘い合って遊ぶが、遊びに必要な物や場、仲間入りなどをめぐって思いがぶつかり、いざこざになることがある。

生活の連続性

- 日に日に暑さが増し、戸外で水を使って遊ぶことが多くなっている。

興味や関心

- 自分なりに見立てて遊ぶことが楽しい。
- 砂や水の感触が心地いい。
- 汚れたり濡れたりすることを気にしないで遊ぶことが楽しい。

保育者の願い

- 興味をもった遊びに思う存分取り組んでほしい。
- 自分なりに見立てて遊ぶ楽しさを味わってほしい。
- 気の合う友達と一緒に遊ぶ楽しさを経験してほしい。
- 自分とは違う友達の思いにも気付いてほしい。
- 汚れを気にせず、思い切り心も身体も開放して遊んでほしい。

ねらい（○）と内容（■）

○自分なりのイメージにそって砂や水の感触を味わいながら、砂遊びを楽しむ。
　■砂を掘ったり積んだりして、山や川を作る。
　■砂や土、草などを使ってごちそうを作る。
○気の合う友達と関わって遊ぶことを楽しむ。
　■気の合う友達と一緒に、砂でごちそうを作ったり食べたり（ごっこを）する。
　■自分の思いを言葉でそばにいる友達に伝える。
○身の回りを清潔にし、生活に必要な活動を自分でしようとする。
　■手洗いや衣服の着脱など、必要性に気付き自分からしようとする。

計画３　環境構成を考えましょう

環境構成は、子どもの身の回りにある様々なものや人、事柄はもちろんのこと、環境が関連し合ってつくり出す雰囲気や時間、空間も含んでいます。子どもたちが実現しようとしていることと、保育者の意図を重ね合わせて工夫しながら、場や状況をつくっていきます。

ポイント１

保育所保育指針等では、保育の環境に関する以下の４つの項目を設けて、環境を通して行う保育の重要性を述べています。

①子ども自らが関わる環境　　②安全で保健的な環境

③温かな雰囲気と生き生きとした活動の場　④人との関わりを育む環境

特に**３歳未満児では、「子どもたちの自発性を引き出す環境づくり」に注目**しましょう。

ポイント２

ねらい・内容を達成するために、子どもたちが**自ら興味や関心をもって環境と関わり、満足感や充実感が味わえるように、場や状況を工夫**しましょう。

次のような視点で環境構成を考えていきましょう

★興味や関心をもって、自ら関わりたくなるような遊具や用具、材料はどのようなものがよいだろうか。
★イメージしたことが実現できる遊具や用具、またその数はどのくらいだろうか。
★どこにどのように配置しておくとよいだろうか。
★はじめから材料や用具は出しておこうか。それとも、子どもの要求があってから出そうか。あるいは、子どもと一緒に探す方がよいだろうか。
★遊び込むためにはどのくらいの時間が必要だろうか。
★じっくり遊ぶために場の広さはどのくらい確保する必要があるだろうか。
★遊び込むための時間や空間はどのくらい必要だろうか。
★友達との関わりを踏まえた環境をどのように構成すればよいだろうか。
★保育者はどこにいるとよいだろうか。
★子どもの動きを考慮すると保育者はどのように動けばよいだろうか。
★安心して遊ぶことができる雰囲気にするためにはどのような工夫がいるだろうか。
など、これ以外にもたくさんの視点が考えられます。育ちに必要なものを取り上げましょう。

４歳児　６月○日(水)　環境構成の例

子どもの姿・ねらい・内容を受けて環境構成を考えてみると・・・

＜砂場の環境構成＞

・子どもたちが砂を掘ったり積んだりしやすいよう、あらかじめ砂を掘り起こしておく。

・それぞれの子どもが楽しんでいることが異なっているので、自分なりのやり方で砂遊びを楽しむことができるよう、スコップやシャベル、ジョウロやペットボトルの容器などいろいろな遊具や用具を分類し、準備しておく。

・使いたい物がすぐに使えるよう、シャベルや容器などそれぞれを分類して砂場の側に置いておく。

・遊びの様子を見ながら保育者も子どもたちと一緒に砂遊びを楽しみ、楽しい雰囲気をつくっていく。

・自分なりに試したり作ったりすることができるよう、時間を十分保障する。

・たらいに水を入れて、子どもたちがすぐ遊べるようにしたり、使ったものを洗えるようにしたりする。

＜色水遊びの環境構成＞

・色水を作る用具や作った色水を入れるペットボトルなどを用意しておく。

・・・・・・

＜お昼ごはんの環境構成＞

【環境構成の例】

計画４　保育者の援助を考えましょう

援助は、ねらい・内容を達成するために、一人一人の子どもの思いや考えを自分たちで実現していけるように支えていく保育者の関わりです。

ポイント１

一人一人の子どもの**ありのままの姿を受け止め**、心の動きに沿ったきめ細かい援助を考えましょう。

ポイント２

子どもたちの主体的な活動を通して、一人一人が着実に発達を遂げていくために、活動の場面に応じて、**活動の理解者、共同作業者、提案者など、子どもの主体性と保育者の意図をバランスよく**絡ませていきましょう。

次のような視点で援助を考えていきましょう

★一人一人のよさや個性が十分発揮できるよう、子どものありのままを温かく受け止める。
★子どもが気付いたことを受け止め、ともに驚いたり喜んだりし、保育者自身が気付いたことや心を動かしたことを子どもたちに伝える。
★自分でやろうとする気持ちを受け止め、認めたり励ましたりして、自分でやり遂げる充実感が味わえるようにする。
★イメージしたことを自分なりに表現する楽しさを存分に味わえるようにする。
★遊具・道具等の取り合いや思いの行き違いなど、いざこざがあれば、それぞれの思いを受け止め、相手の思いに気付いたり、自分なりに考えたりすることができるようにする。
★困ったり戸惑ったりしているようであれば、どうすればよいかヒントを出したり一緒に考えたりする。
★遊びが見付からないようであれば、遊びを提案したり一緒に遊びを見付けたりして、自分なりの遊びに取り組めるようにする。

など、これ以外にも様々な援助が考えられます。育ちに必要な援助を考えていきましょう。

４歳児　６月○日(水)　保育者の援助の例

子どもの姿・ねらい・内容を受けて援助を考えてみると・・・

＜砂遊びの援助＞

・自分なりに砂と関わって遊ぶ楽しさが味わえるよう、保育者も遊びの仲間になって子どもたちと一緒に砂を掘ったり積んだり、ごちそうを作ったりして、それぞれの遊びが楽しめるように援助する。

・一緒に遊ぶ友達がいる楽しさが感じられるよう、楽しさを共感したり、仲良しがいる嬉しさを受け止めたりしていく。

・子ども同士のイメージの違いなどからいざこざが起こったときは、それぞれの思いを受け止めたうえで、相手にも思いがあることを知らせ、どうしたらよいのかを一緒に考えるようにする。

・仲間に入りたいものの、うまく関われないために戸惑いを感じているようなときは、それぞれの思いを受け止め、お互いに思いがあることに気付けるように仲立ちをし、どうしたら自分の思いが分かってもらえるのか一緒に探っていく。

・汚れることに抵抗がある子どもには、その子どもが楽しみにしていることに寄り添って一緒に楽しみ、思いっきり遊ぶことができるように援助する。

・保育者も一緒に片付けながら、子どもたちが力を発揮している姿を認めたり、片付けた後がきれいになった心地よさを知らせたりして、自ら片付けに取り組んでいくように援助する。

＜色水遊びの援助＞

・子どもと一緒に色水遊びに使う花を見付けながら、咲いている花としぼんだ花の違いに気付くよう援助する。

・色の違いや変化などその子どもなりに気付いたことを受け止めたり、喜んでいることに共感したりして、発見する楽しさが味わえるように援助する。

・自分のイメージしたことが実現することでより遊びが楽しくなるため、戸惑っているようなときは、子どもの思いを聞きながら、思いが実現できるようさり気なく手助けをしたりアイデアを出したりする。

・・・・・・

＜お昼ごはんの援助＞

・・・・・・

実践　実際に保育をしましょう

指導計画をもとに事前に環境を構成して、実際の保育に臨みます。

指導計画はあくまで計画です。子どもの状態や天候、突発的な出来事などにより、計画とは違った展開になることもあります。

そのため、その場に応じた保育者の援助や環境の再構成が必要になることもあります。

実際の援助

子どもとともに行動しながら、一人一人の**ありのままを受け止め**、その育ちを理解し、適切な関わりを行いましょう。

実際の保育では、次のような援助を心がけましょう

★子どもたちが自分らしさを発揮して、安心して遊びや生活に取り組めるよう温かく見守ったり関わったりする。

★豊かな体験ができるよう、子どもたちの喜びや悔しさ、驚きや発見に共感し、子どもたちの心に寄り添う。

★友達との関わりが広がったり、深まったりするよう、友達と遊ぶ楽しさはもちろんのこと、いざこざなども含め多様な関わりをする。

環境の構成・再構成

子どもたちに適切だと考えていた環境が、いざ活動を始めてみると**変更が必要になること**もあります。それが環境の再構成です。**子どもの興味や関心に沿って**再構成をしたり、子ども自ら再構成できるよう促したりしていきましょう。

環境を作り変える

環境とは、単に固定的に構成すればよいわけではありません。**子どもの育ちや活動の状況に応じて作り変える柔軟さが必要**です。一方で、保育室の基本的な構造をいつも変えていては、安定感がなくなります。また、広いだけの空間でも、じっくり遊び込める空間になりません。ある程度、安定感のあるコーナーを作ることが必要になります。

乳児が安心してじっくり遊び込めるために、乳児室の前の園庭に、乳児だけの空間を作りました。（プランター、テント、滑り台、砂場、テーブルなど）

乳児が保育者と一緒に、じっくり、たっぷり身体を使って遊ぶことができます。また、囲いはプランターにしていることから、すぐに出入りできる状況に変化させることもできます。

〔環境のコーナー例〕

★ままごと・ごっこスペース
★絵本や図鑑スペース
★構成遊びスペース（積み木・ブロック・パズルなど）
★自然物スペース（飼育物・植物など）
★アートスペース（描く・作るなど）
★作業スペース（テーブル・テラスなど）
★生活スペース（食事・睡眠・手拭きの場、ロッカーなど）
★運動遊びスペース（大型積み木・巧技台・滑り台・マットなど）

大切なことは、コーナーが独立した遊び込めるスペースにすることだけではなく、子どもたちがそれぞれのコーナーを行き来したり、交流できたりすることも大切です。そうすることで、豊かな対話が生まれ、遊びが豊かに発展していくでしょう。常に、**子どもの主体的な遊びが保障されるようなコーナー作り**を心がけていきましょう。

評価・改善　今日の保育を振り返りましょう

保育を終えた後、子どもの姿はどうでしたか。指導計画を基に振り返り（評価）、明日の保育につなげていきましょう。

保育の振り返り（評価）とは

保育における振り返り（評価）は、 **子どもの発達する姿を捉えること**と、それを生み出した**環境構成や援助、ねらい・内容は適切であったかどうか**を検討することの**両面について**行うことです。

保育における評価は、保育者の計画通りに子どもたちが活動したか、あるいは保育技術がどうであったか、また単なる感想などではありません。

ポイント１

子どもの姿の振り返り

★「計画１（Ｐ23)」で示している子どもの姿を振り返る視点を参考に、今日の子どもの姿を振り返りましょう。

ポイント２

保育者（指導計画）の振り返り

★ねらいと内容が適切でしたか。

★環境構成は適切でしたか。

「計画３(Ｐ27)」で示している環境構成の視点を参考に振り返りましょう。

★保育者の援助は適切でしたか。

「計画４(Ｐ29)」で示している援助を参考に振り返りましょう。

保育の振り返りの例（砂遊びの場面:抜粋）

心に残った場面を振り返る

砂場にカップやお皿などを置いておくと、Ｅたち４人のごちそう作りが始まった。しばらくすると、一人で遊ぶことが多いＩも４人のそばで、ごちそう作りを始めた。保育者もその姿を嬉しく思い、ごちそう作りに加わった。子どもたちは、ごちそうを作っては、「これは、妹の誕生日ケーキ」「クッキーができた」「甘い、甘いコーヒー牛乳です」などと言っていた。

ただ保育者との言葉のやりとりは多いものの、子ども同士の言葉のやりとりはあまり聞かれなかったが、どうすればよかっただろうか。

環境や保育者の関わりを振り返る

★砂場の遊具や用具の種類や数は、よかっただろうか。
★一人一人が楽しいと思っていることに共感できていただろうか。
★子ども同士の遊びをつなげる関わりをした方がよかっただろうか。
★仲間には加わらず、その様子を、もう少し見守っていた方がよかっただろうか。

もっと掘り下げてみる

子どもたちが楽しんでいたことは、何だったんだろう。
（今日の子どもの姿をもう一度思い浮かべてみよう）

★ＥとＦは２人で、型ぬきをしたものに、砂や小石などを飾って、いろいろなケーキを作ることを楽しんでいた。
★Ｈは、お気に入りのカップで型ぬきをして、たくさん並べていくのが楽しそうだった。
★Ｉは、４人の遊んでいる様子を見ながら、友達のしていることをまねて、型ぬきを楽しんでいた。

明日の保育につなげる

４人は同じ場所で遊んでいるが、**自分なりのイメージで遊びを楽しんでいる。**一人一人の思いを受け止め、子どもと共感する関わりをもったことが、遊び込めたことにつながったのではないかと思う。

このことを**これからの育ちにつなげていくためには、**まずは一人一人の子どものイメージを豊かにしていくことが大事ではないだろうか。

このように**子どもの姿を振り返ってみると**、（計画の「内容」に示した）「自分の思いを言葉でそばにいる友達に伝える」ことよりも、**作ったものを見立てて発している言葉を、保育者が仲立ちをしながら**、徐々に子ども同士が自分の思いを言葉で**伝えることができるようにしていきたい。**

明日の砂場の環境構成は

【保育者の振り返り】

今日はテーブルでごちそうを作る子どもたちが多くなっていったので、テーブルを２台に増やした。

自分なりのイメージで遊ぶことを楽しんでいたが、自分が気付いたことを友達に伝えようとする姿も見られたので、友達と思いが通い合う喜びが味わえるよう、子どもの言葉を橋渡しする援助をしていきたい。そのため、お互いの遊びの様子が分かりやすいように、明日は、テーブルを１台にしておく。

ゆったり遊ぶことができる場が足りなくなったり、子どもたちから要求があったりしたときは、すぐに出せるようにもう一台準備しておく。

子どもたちの気持ちは、漠然と見ているだけでは分かりませんが、**子どもたちとともに活動**していると少しずつ気付くようになります。子どもたちの表情やしぐさ、言葉などから、子どもの願いや欲求を探り、明日の保育の計画を考えていきましょう。

幼稚園教育要領　第１章　第１節　幼稚園教育の基本（解説：Ｐ26）

【保解説：Ｐ21・Ｐ280、認解説：Ｐ27・Ｐ300】

･･･（略）教師は，幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき，計画的に環境を構成しなければならない。この場合において，教師は，幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ，教材を工夫し，物的・空間的環境を構成しなければならない。また，幼児一人一人の活動の場面に応じて，様々な役割を果たし，その活動を豊かにしなければならない。

～素材や道具にこだわって～

教材の特質に関する知識を保育者がもっていれば、子どもが「何で？」という不思議な感覚や驚きの体験をすることができるような環境構成をすることが可能となり、科学性の**芽生えを育む**ことにもつながります。つまり、幼児期は理屈で理解するのではなく、不思議さの体験や驚き、喜びなどの積み重ねが、小学校以降の科学的な思考を支えるイメージをつくっていくのであり、それを支えるのが**保育者の専門性**だと言えます。

例えば、３歳以上の水・砂・土との関わりは、よりダイナミックになっていくため、素材や道具にもこだわりたいものです。泥団子一つとっても場所によって土の種類が違うと、泥団子のでき方も違ってくるため、それぞれの場にふさわしい多様な道具を、子ども自身で選びやすいように分類・整理して用意しましょう。

また、保育者のアイデアや工夫によって、子どもがそれまで以上に夢中になって遊ぶ姿を見たときは、そのアイデアや工夫を他の保育者に伝えたり、実践を積み重ねてより活用しやすく工夫したりして、子どもの学びを深めていきます。こうした保育者の日々の営みが、**教材研究の基盤**にもなります。

第３章

みんなで高め合う園内研修

Ⅰ　園内研修とは

研修とは、職務上必要な知識や技術を習得するための学びの機会のことです。その大切さは誰もが理解していると思いますが、近年の教育・保育現場は忙しいことから、必要性は分かっていても、研修は負担に感じられるかもしれません。

そこで、少し見方を変えてみましょう。

みなさん、**保育の楽しさはどういうところにありますか。**子どもや保護者が自分を信頼してくれること、その信頼を基盤に子どもがいろいろなことに興味・関心をもって生活や遊びを楽しんでいる姿を見ること、子どもが育つ瞬間に立ち会えること、その子どもの育ちや学びに保育者が貢献できることなどではないでしょうか。

そう考えると、少し工夫をして、そういうときをより豊かにもてるようになると、さらに保育が楽しくなるのではないでしょうか。しかも、自園の子どもたちのことを一番知っている保育者同士で、「こんなことを楽しんでいたよ」「もう少しこうしてみたらどうかな」「こんなとき、どうしたらいいだろう」などと、**試行錯誤していくことは、マンネリ化や繰り返しにならない、新たな発見もある、生き生きとした教育・保育の展開に結び付いていきます。**それが「保育の質の向上」につながり、「子どものよりよい育ち」や「子どもの最善の利益」につながります。

【保育現場における研修の種類と意義】

★自己研鑽→個人的に研修会に参加したり、書籍を読んだりして学びを深め、さらに、学んだことを保育に生かしたり工夫したりしながら、自分自身の力量を高める。

★園外研修→職務として園外での研修会などに参加して学びを深める。特に、園内だけでは得られない新しい保育の考え方や乳幼児の発達、子どもを取り巻く社会の変化等について学ぶことができる。また、その学びを園の教職員に伝え合うことで、園全体の質向上につながる。

★園内研修→職務として園内で教職員同士が日常の保育実践を検討するなどして、一人一人の子ども理解を深め、園内の教職員が共通理解を図ることができる。このことが、園内の協力体制を強めたり、協同性や同僚性を高めたりすることにつながる。

Ⅱ　園内研修をやってみよう

１　有意義な園内研修にしていくために

（１）園内研修の方針を明確に共有しておく

【保育者一人一人が主役】

主役は、管理職でも外部講師でもありません。保育を実践するのは保育者一人一人で、保育実践では、その場その時の瞬時な判断が求められます。

園内研修の場でも、自分で考え、判断するという習慣を身に付けることができるよう、**自分なりの意見をもち、同僚の考えを取り入れる**ことで、よりよい学びにつなげていきましょう。

その**プロセスが大切**です。

【楽しい雰囲気で行うこと】

「楽しい」というのは、単に面白おかしいということではなく、学び合う雰囲気の中で、集中して課題について協議でき、明日の実践が楽しみになるような状態のことです。教育・保育には様々な方法が考えられるため、正解は一つではなく、完璧な正解もありません。安心して様々な意見や悩みを出し合い、柔軟な発想を促しながら、共に学ぶことを楽しめるように進めていきましょう。

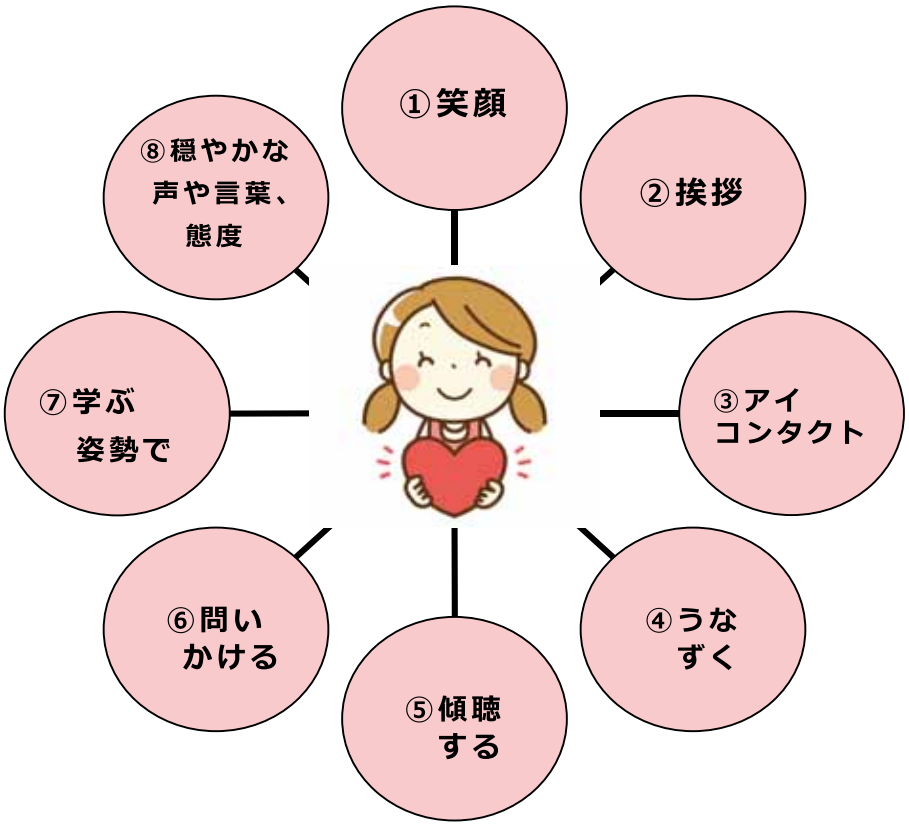
これは、**管理職の重要な課題**でもあります。

【地道に継続していくこと】

教育・保育の質は、１回だけの研修で飛躍的に向上することはありません。明日からの実践にすぐに取り入れられるような協議を、少しずつ**積み重ねていくことが大切**です。試行錯誤して少しずつ進化していく、という営みの繰り返しなのです。

（２）基本的なルールを共有しておく

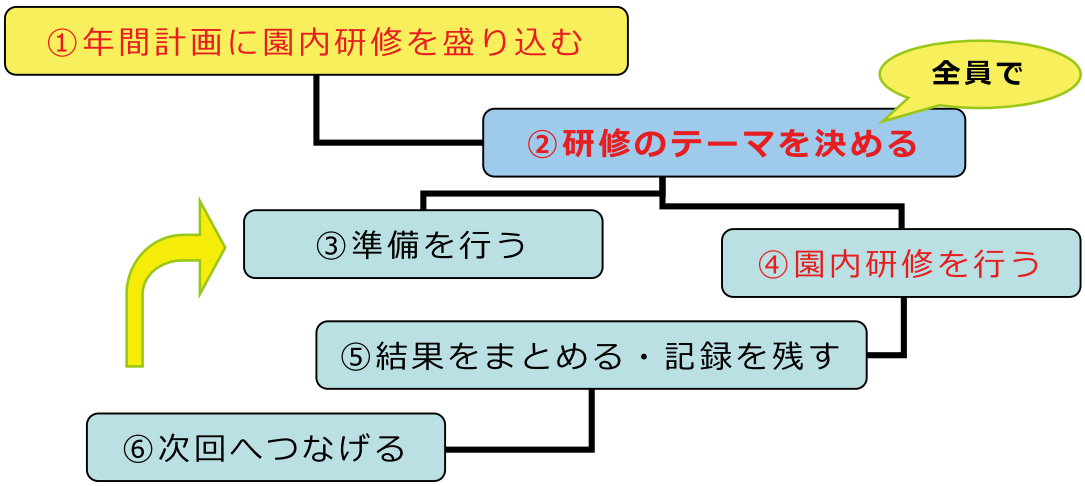
園内研修は**人と人との直接的なコミュニケーションで成り立っています。**ですから、「子どものよりよい育ち」や「子どもの最善の利益」という目標に向かって、**自分たちの経験を交流させやすいよい雰囲気をつくり出すことで、その効果を高めることができます。**下図に示したような行動を、一人一人が心がけてみましょう。



話し合いは、勤務年数や役職の違いなど、様々な背景がある中で進められることになります。いつも、特定の人のペースで進むことにならないよう互いに配慮し、一人一人の教職員の**よさや力を存分に出し合うこと**を心がけましょう。ささいなことでも『新たな発見』があると、心躍る研修になります。そうして学び合うことで、保育を楽しみ、自分自身の成長を楽しみ、保育の価値を高めましょう。それが何より、子どもがよりよく育つことにつながります。

2　園内研修の進め方

（１）基本的な進め方



①年間計画に園内研修を盛り込む

園内研修の効果を高めるには、**計画性と継続性が必要**です。定期的に実施できるように、**年度初めに**年間計画の中に盛り込んでおきましょう。このことは、**管理職と研究主任・ミドルリーダー等の役割**となります。

> 新規採用保育者研修や中堅教諭等資質向上研修の対象者等が在籍している場合は、教育センターの研修日程も併せて調整をしましょう。

②研修のテーマを決める

日程と合わせて、研修内容（テーマ）を決めます。自園の「めざす子ども像」や「園目標」等を念頭に置き、今求められている保育に関する課題や改善したいことなどについて、管理職をはじめ保育者**全員で意見を出し合い**ながら、一緒に決めていきましょう。そうすることで、１年間、同じ方向性のもと、見通しをもって研修を深めていくことができます。また、これ自体が園内研修となります。

【例】「○○園　園内研修年間計画表」

研修目標	・子ども一人一人が主体的に遊びや生活に関わっていけるような保育者の援助や環境構成について
目標設定の理由	・園の実態　・育てたい力　・具体的な取組などから
月	内　　容
４月	・今年度の研修目標の決定と年間園内研修計画の作成
５月	・２歳児の保育についての園内研修

③研修の準備を行う

管理職や研究主任等が**役割分担**しながら、研修に必要なことや物を確認していきましょう。　　（詳しい進め方や準備物、配慮事項は P42～を参照）

・時間や場所　　・参加者人数やグループ編成
・準備物（模造紙・付箋紙・ペンなど）
・テーマに迫る話し合いの視点
・公開保育を行う場合は、当日に向けて日案（P53～参照）が必要になります。

公開保育クラスの担任は・・・

日案は、**管理職や研究主任等に**見てもらい、日ごろの子どもの姿などから**ねらいや内容について相談**をして、助言を受けましょう。

また、その中で、公開保育を通して学びたいことや課題と感じていることなどを伝え、明日の保育につながる研修にしていくことを意識しましょう。

複数担任の場合は、子どもの生活や遊びの流れを大切にするためにも、普段からの保育の中で感じていることや指導の方法について相談しながら、**共に日案を作成する**ようにしましょう。

④園内研修を行う

研修の要となる**ファシリテーター（進行を促す人）**を決めておき、参加者が混乱しないようにしましょう。**ミドルリーダー等の役割**になります。

ファシリテーターは、園内研修が充実したものになるよう、事前に、子どもの様子や保育の「ねらい・内容」「保育者の願い」「園内研修で検討してほしい視点」などについて、担任から聞き取りをしておくことが重要になります。そして、その情報をもとに、園内研修のもち方を検討していきましょう。

また、事前の聞き取り内容や日案作成への助言については、**管理職にも相談し、園全体で取り組む体制**をつくっていきましょう。

協議を進めるための基本的条件

★意見をもつこと
★意見を発言すること
★意見を共有すること

ファシリテーターは、参加者全員がこれらのことを実現できるよう、意識して進めていきましょう。

⑤結果をまとめる・記録を残す

話し合いでの対話の内容等を、**模造紙やノートに記録**し、掲示したり回覧したりして、参加できなかった教職員にも**理解を促す手立て**を工夫していきましょう。

⑥次回の園内研修へつなげる

実施した研修内容や方法が適切であったかどうかについても振り返るとともに、話し合いで出た意見が、**次の実践に生かされているかどうかについても評価**しましょう。実際に保育実践を見直す営みにしていくことが大切です。

次ページ以降に紹介する園内研修の実践例を参考に、ぜひ皆さんの園でも園内研修に取り組んでみましょう。

「プロ」としてお互いを認め合い、建設的な意見を率直に言い合い、助け合い、学び合う職場環境の風土をつくっていきましょう。

どのようなつぶやきや思いが聞こえてきそうですか

（２）園内研修のいろいろ

田の字法　～子どもの姿から今の課題を探ろう(足場を確かめる)～

【目　　的】これまでの取組を振り返りながら、参加者全員の意見を整理して、合意形成を図る。
（クラスや園の目標設定など現在の足場を確かめるときに大変有効。）

【ポイント】
・今の状況を具体的に出し合うことで、ネガティブ思考からポジティブ思考に向けることができる。
・今の自分たちの意見が整理され目標が具体化されるので、このワークでこれから実行することを挙げ、後日振り返っていくことが大切。

【準備する物】各グループ：模造紙１枚、カラーペン
個人：付箋４色（各３～５枚程度）、サインペン

【所要時間・人数等】１時間程度、１グループ５～６人

●テーマ例　・行事の振り返りから、クラスの取組を考える
・１年間の振り返りから来年度の方向性を考える　等

●進め方

1　５～６人のグループをつくり、進行役、記録役を１人ずつ決める。
2　進め方を説明し、付箋を配付する。（１人４色）（１分）
3　付箋に自分の意見を端的に書く。（５分）
4　付箋の意見に言葉を足しながら発表する。（似た意見を同じところに貼る）
5　似た意見の付箋ごとにグルーピングしタイトルを付け、①～④の順に話し合いを進める。
6　④の付箋に目標達成までの取組順位を付ける。（上位３位ぐらいまでナンバリングする）

●協議イメージ

（①から④までそれぞれ違う色の付箋に書き、グルーピングしながら整理する）

①よさ ・好きなところ ・続けたいこと・強み ・誇れるところ・気に入っているところ ・現在取り組めているところ	④目標 ・こうなりたいというイメージ ・手立て・希望
②課題 ・悩み・難しいと思うところ ・取り組めていないところ ・足りないと思うこと	③課題の要因 ・不安なこと・障壁 ・課題と感じていることに取り組めない理由 ・こうなったらいやだから解決できない

●まとめ

「④目標」でナンバリングした目標を具体化して取り組み、後日振り返るとさらに効果的。

事例研修　～エピソードから子どもの育ちや保育者の関わり、環境構成について語り合う～

【目　　的】子どもの見方を深めるとともに、他の保育者の意見を聞くことで、自分の保育を振り返り、保育者の関わりなど課題や改善点を共有する。
【ポイント】具体的な子どもの姿を基に話し合うことで、子ども理解につながる様々な視点をもつことができる。

【準備する物】エピソード（感動した場面や気になっている場面など、子どもの表情、しぐさ、人や物との関わり、保育者の関わりなどできるだけ具体的に）、模造紙、付箋(3 色)、カラーペン　等

【所要時間・人数等】1 時間 15 分程度、１グループ５～６人

1　全員がエピソードを読み、執筆者がエピソードを取り上げた理由やその場面について説明し、事実を読み取る。（15 分程度）

①執筆者は、なぜこのエピソードを選んだのか、どの姿が目にとまったのか、自身がどう感じたのか、背景や主要な部分を具体的に発表する。（写真があれば、提示しながら説明するとより分かりやすいでしょう。）

②エピソードの背景をより明らかにするために、執筆者に質問をする。

2　読み取った事実の解釈をする。（40 分程度）

読み取った事実からどんなことが言えるのか自分なりに考え、みんなで共有する。

〈協議例〉

①読み取った事実を黄色の付箋に書き、それについての解釈（育っている姿や経験していることなど）を桃色の付箋に書く。

【黄色付箋】読み取った事実

Ａちゃんが Ｂちゃんに何度も声をかけている。

【桃色付箋】解釈

一緒に遊びたい気持ちが強いのではないか。

②付箋に書いた内容を発表しながらカテゴリーごとに整理し、模造紙などに貼っていく。

③カテゴリーごとにそれぞれの考えを出し合いながら、模造紙に書き込んでいく。

3　今後の環境構成や援助について考える。（15 分程度）

①２の③までで見えてきた子どもの姿や保育者が工夫していたポイントなどを踏まえて、遊びがさらに深まる環境構成や援助について水色の付箋に書く。
②付箋に書いた内容を、そう思った理由とともに発表しながら模造紙上に整理していく。

4　よさや課題を次につなげる。（5 分程度）

①よかったことや改善点を確認し、全員で共有する。
②執筆者の気付きや学びを記録や計画に取り入れ、参加者以外にも共有できるようにしておく。

公開保育協議（KJ 法）～今日の保育の振り返りから明日に向けて～

【目　的】
・実際の保育を通して、実践者・参観者がともに子どもの姿から育ちつつあることを協議し、環境構成や保育者の援助等について学び合う。
・多様な意見に触れ、保育について振り返る。

【準備する物】 グループ数の模造紙、付箋（３～４色）、サインペン、カラーペン

【所要時間・人数等】 1.5～２時間、１グループ５～６人

1　園や実践者のめざす子ども像から、協議の視点を決めておく。「自ら回りの人やものと関わって遊ぶ子ども」など、目標やめざす子ども像の肯定的な視点で保育を見る。

見付けた「①子どもの姿」や、推し測った「②子どもの育ち（内面）」「③その姿につながった環境構成や保育者の援助」が書けるようメモ用紙を準備しておくとよい。

2　「①子どもの姿」と「②楽しんでいること（内面）」を２色の付箋にそれぞれ記入する。

メモ用紙をもとに、協議の事前に付箋に記入しておく。また、「③その姿につながった環境構成と保育者の援助」も一緒に記入しておくとよい。

3　①と②の付箋で、視点に応じた子どもの姿とその内面の理解を伝え合い、遊びあるいは育ち（内面）でグルーピングし、タイトルをつけて整理する。

遊びで整理した場合、楽しんでいることや経験していることを、遊びや育ち（内面）の付箋の近くに書き加えると、その時期の発達や育ちが見えてくる。

4　「③その姿につながった環境構成や保育者の援助」の付箋を、「環境構成」と「保育者の援助」に貼り分けながら出し、見やすく整理する。

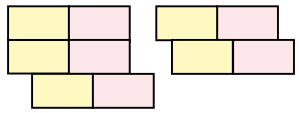
5　「④明日の保育につなげるためにプラスしたい環境構成と保育者の援助」を、ここまでの協議を踏まえて口頭で出し合い、出された意見をまとめる。

「環境構成」と「保育者の援助」で分けて整理したり、さらに深めたい視点について考え、意見を出し合ったりする。

《 園内研修　公開保育協議（模造紙）のイメージ 》

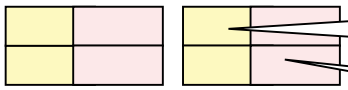
○月○日　○歳児園内研修

おにごっこ



・追いかけることが楽しい
・捕まらないように逃げることが楽しい

お面づくり



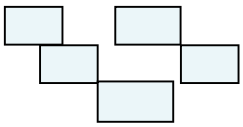
① 誰がどこでどんなことをしていたところでしょう

② 何を楽しんでいたでしょう

・自分なりに作ることが楽しい
・友達と一緒に作ることが楽しい

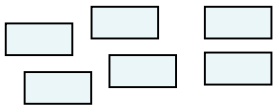
③環境構成

素材ごとに分けられ取りやすい環境

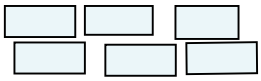


③援助

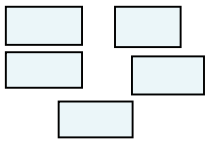
考えを促す声がけ



幼児が扱いやすい道具



保育者自身がなりきる



④★明日の保育につなげるためにプラスしたい環境構成と保育者の援助

環境構成

・製作コーナーとままごとコーナーの距離をもう少し取る
・紙の種類（例えば○○）を増やす

援　助

・保育者も遊びの一員となって一緒に楽しむ

行事について見直そう　～指導計画から話し合う～

【目　　的】「子どもの育ちにつながる行事とは」
長期の指導計画と結び付けて考える（園目標やめざす子ども像の達成に向けて）
【ポイント】発達に適切なものを精選し、園生活に変化や潤いを与える行事にする

【準備する物】長期の指導計画（年間・月間）、付箋・模造紙・カラーペン、
レジュメ、筆記用具（サインペン）等

【所要時間・人数等】
１～1.5 時間、１グループ４～５名（同年齢や近い年齢クラス担任等のグループ）

1　行事の目的について見直してみよう

幼稚園教育要領 第１章 第４節３ (5)行事の指導　　（解説：P114）※一部要約

行事の指導に当たっては、自然な幼稚園生活の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。

なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。

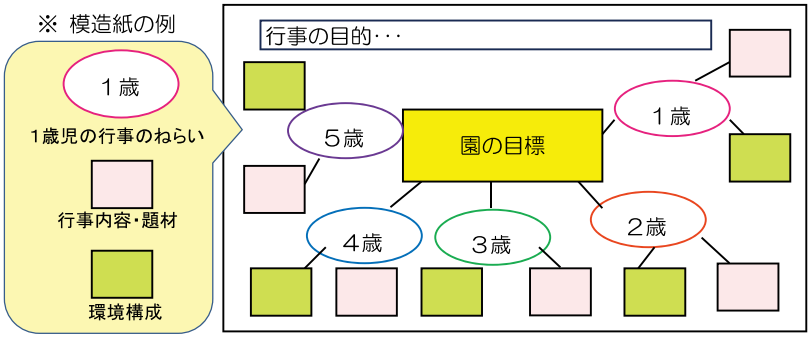
長期の計画を念頭に、必要な体験を得て遊びや生活が意欲的になるよう、事後も考慮することが大切。

2　付箋を使ったグループ協議（＊視点参照）で、各年齢の長期の目標から行事のねらい等を考える。

①月や期の各年齢のねらいから、行事のねらいを立てる。
②ねらい達成のための行事の題材を考える。
③それまでの事前の取組となる環境構成等を考える。

3　全体で協議内容を共有し、年齢の育ちを見通してみる。

①各グループの発表を聞き合い、模造紙などにまとめる。
②全体で年齢の育ちを見通してみて、気付きを出し合う。



＊行事の取組や協議の視点

(1)取組による変化を見通す
・その年齢や発達段階ならではの活動等を意味付ける。
・事後も繰り返し遊びたくなるような経験にする。
・「年長の姿に憧れる」など、自然に異年齢の関わりが生まれるようにする。

(２)保護者や地域への発信
・行事のねらいの意味
・ねらいの達成に向けた取組
・取組過程での子どもの変容等、園便りやクラス便りで「できる・できない」だけにならない取組や成長の過程を知らせる。

4（事後の共通理解）　指導計画を加筆・修正し、次へ生かす。

・行事のねらいを指導計画に反映させ、評価・反省や育成記録にまとめるようにする。
・指導計画へ、次年度に向けたヒントとなる成果や課題を書き入れておくとよい。

子どもの育ちを保護者に伝えよう　～ver.1～

【目　　的】日々の保育の中で見られた子どもの育ちを、保護者にどのように伝えるかを考え、ともに成長を喜び合えるようにする。
【ポイント】どんなささいなことでもよいので、子どもの育ちを見逃さないことが大事。

【準備する物】模造紙（大きめの紙）、付箋（2 色）、サインペン、カラーペン

【所要時間・人数等】　35～40 分、1 グループ 3～4 人

1　うれしかったことを書く。（5 分）

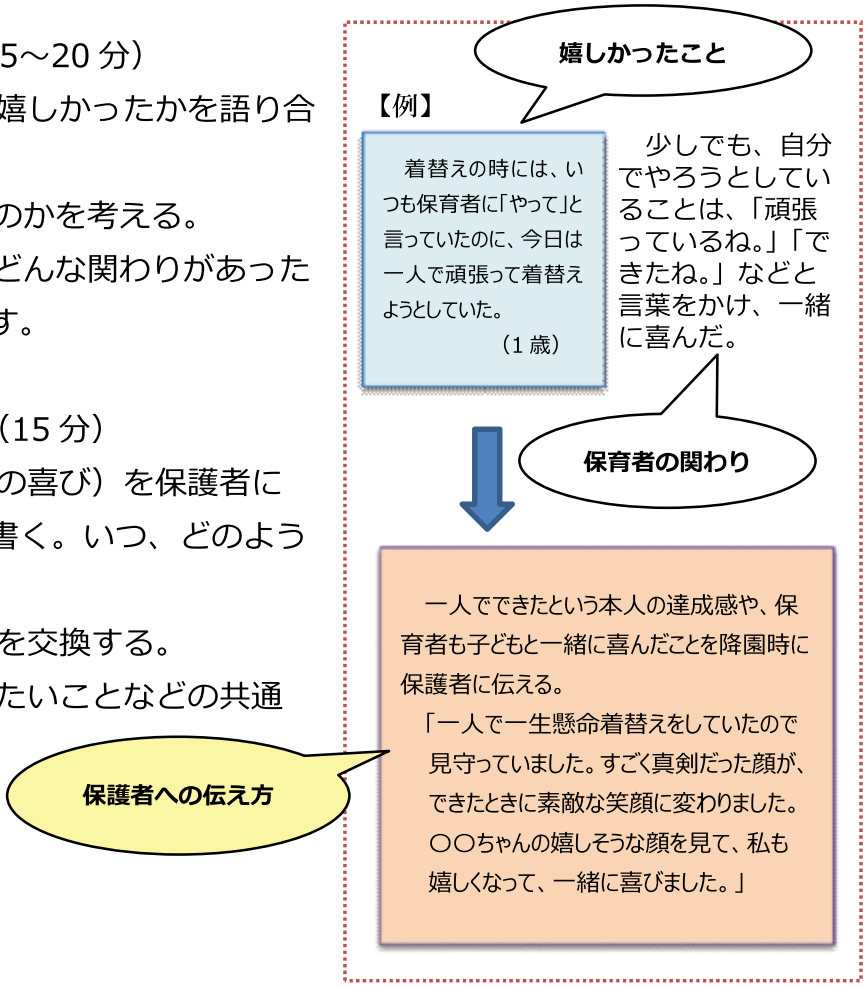
①保育を振り返り、子どもの生活や遊びの場面から、嬉しかったことを付箋に書く。
※これまでと比べて、子どもができるようになったこと、子ども同士の関わりの中で見付けたこと等、気付きを大切にして、できるだけ具体的に書き出す。

2　子どもの育ちを共有する。（15～20 分）

①付箋を出しながら、どうして嬉しかったかを語り合う。
②子どもにどんな成長があったのかを考える。
③子どもの成長には、保育者のどんな関わりがあったかなどを付箋の周りに書き出す。

3　保護者への伝え方を考える。（15 分）

①自分の気付き（子どもの育ちの喜び）を保護者にどのように伝えるか、付箋に書く。いつ、どのような方法で伝えるのかも考える。
②付箋を出し合いながら、意見を交換する。
③保護者への伝え方で大事にしたいことなどの共通理解を図る。



事例研修　～子どもと保護者への理解を深め、支援を探る～

【目　　的】複数の保育者から見た（気になる）一人の子どもの姿から、その子どもの課題、親子の背景を探り、多面的に理解を深める。また、親子に今後必要な支援を考え、それぞれの保育者の立場でできる支援と役割を明確にする。

【ポイント】より多くの情報を出し合う。その情報の中から、事実を確認していくことが大事。

【準備する物】

親育ち支援実践シート・模造紙・付箋（４色）・サインペン・カラーペン等

【所要時間・人数等】１～２時間、１グループ５～６人

事前に　**話し合いたい親子について、園全体で確認しておく。**

★事例提供者

子どものよさ、気になるところ、課題を整理しておく。

★研修参加者

子どもの様子や保護者について、よく観察しておく。

よく砂場でＢちゃんと遊んでいるなあ。

1　子どものよさ、気になる姿、子どもの課題について出し合う。（30 分）

①事例提供者から事例として選んだ理由等について説明を聞く。

②子どものよさ、気になる姿について、それぞれ付箋や口頭で出し合う。

③子どもの発達の課題を考える。

※出てきた意見は、模造紙等に書き起こすなど整理し、可視化していく。

2　子どもの課題から、子どもへの園での関わりや保護者との関わりで考えられる原因・背景を考える。（30 分）

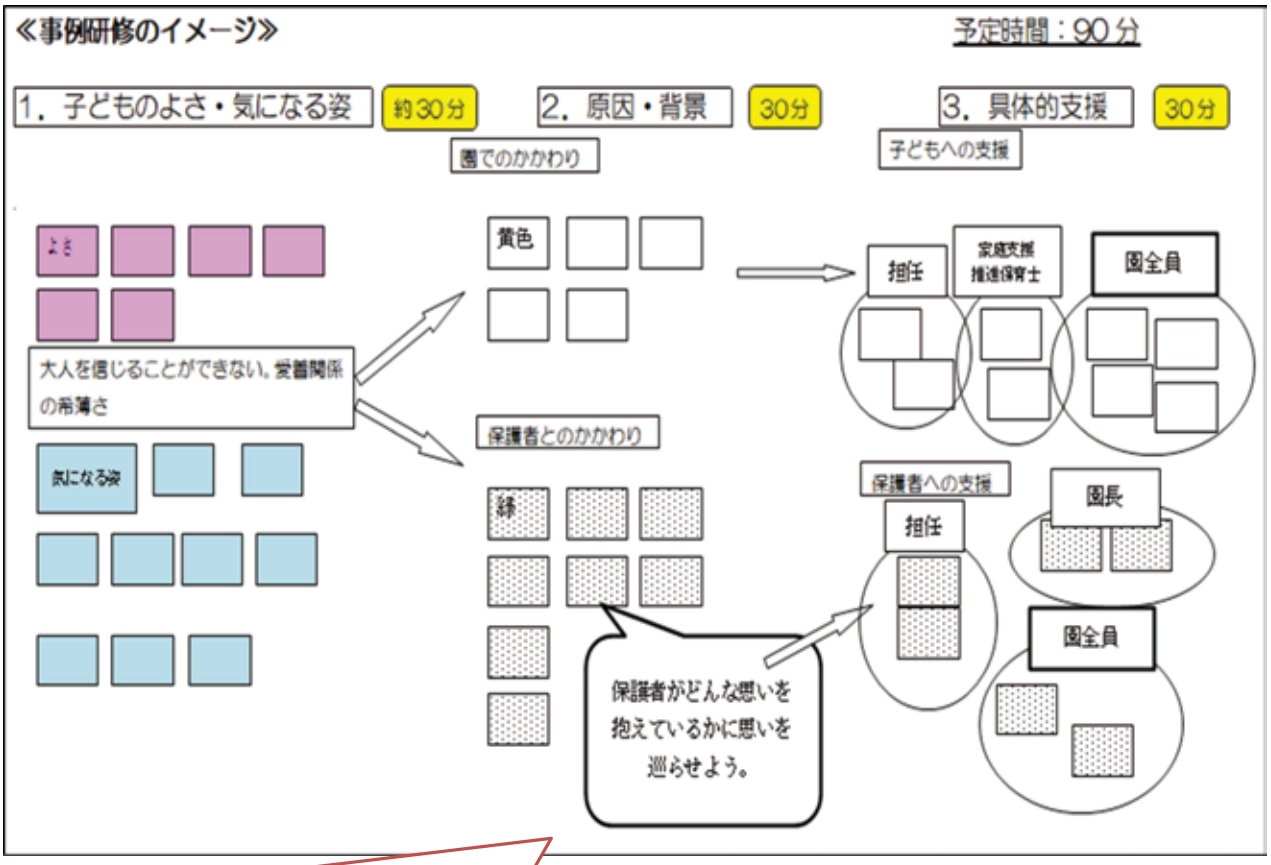
子どもの姿や課題、子どもの思いから、これまでの保育者の関わりや保育環境を振り返り、園で足らなかった支援や、保護者の状況や家庭での対象児への関わりで必要と思われることを考え、付箋や模造紙に出し合う。

3　原因・背景から、子どもと保護者への今後の支援を考える。（30 分）

できるだけ具体的に、誰が、いつ、どのような場面で、どのような支援を行うかを出し合う。支援を整理し、明日から誰がどの支援を行っていくのかを確認する。

※２～３か月後に、支援によって見られた子どもや保護者の変容について振り返り、残された課題や今後の支援を考え継続的に取り組むことで、子どもや保護者の成長が確認できます。

※親育ち支援地域リーダー等の優れた実践を聞いたり、可能な範囲で地域リーダーに園へ来てもらい事例研修を実施したりする取組は、保育者の親育ち支援力を高めることに効果的です。



・模造紙の使い方や書き方については、参加者が分かるように書き込めばよいでしょう。

・口頭で出てきた意見も書き込んでいくと、参加できなかった保育者も、後から模造紙を見ることで、支援の共通認識をもつことができます。

子どもの育ちを保護者に分かりやすく伝えよう　～ver2.写真から～

【目　　的】子どもの育ちを多面的に捉えるとともに、育ちや成長の喜びを保護者が感じることができる伝え方について実践力をつける。
【ポイント】子どものしぐさや表情、状況などから、保育者が心動かされた写真を用意する。コメントを聞き合うときは保護者の立場で実感したことを出し合う。

【準備する物】写真１～２枚（Ａ４サイズ）、模造紙
付箋（大･･･１色、中･･･２色）、サインペン、カラーペン
登場人物の年齢や保育環境等写真に関する情報、進行手順　　等

【所要時間・人数等】60 分、１グループ３～４人

1　写真から、対象児の考えられる育ちとその根拠を付箋に書く。（５分）

①表情、視線、体の使い方などから育ちについて読み取っていく。

型ぬきをする中で、形を自分でつくってみようとする力が育ってきているのではないか。
（育ち）

手元の型ぬきをじっと見て、集中している様子から。
（根拠）

１歳児（左からＡＢ）
砂場の近くで型抜きをしていた対象児Ｂ

2　事例提供者より、写真についての説明を聞く。（15 分）

①事例提供者は対象児の日頃の様子や保護者の実態を伝え、参加者は具体的にイメージしてみる。
②対象児や保護者の情報を共有する。

母親は早朝から夜勤までこなしている。Ｂについては園を頼りにしているが、忘れ物等はない。

手紙をきちんと見ている証拠だよね。

3　対象児の育ちを保護者に伝えるコメントを書き、読み合う。（25 分）

①伝えたいことを決め、付箋（大）に書く。
②順番に読み合う。
③保護者の立場として聞き、感想を伝え合うことで、分かりやすさや読みやすさについて話し合ってみる。

（方法･･･手紙、育ち･･･観察力・集中力）
「さあ、どうかな？朝から砂場にでかけていったＢくんたち、・・・」

こんなコメントだと興味がわくよね。

4　保護者に分かりやすく伝えるポイントをまとめる。（15 分）

①分かりやすく読みやすいポイントを確認し、協議の感想などを共有しておく。

～手作りおもちゃのコーナー～　年齢は大まかな目安です

1 歳児前後
　つまむ・たたく・引っ張るなど手や指を使って遊ぶ

1 歳児～
　段ボールなどを活用して･･･
　乗ったりついたりして、見立て･つもり遊びをして遊ぶ

のぞいたり、くぐったりして、探索活動をして遊ぶ

1・2歳児～
　ファスナーやボタンを使って楽しく遊ぶ
　身の回りのことを「自分で」しようとする経験へつながる

1 歳児～
　身近な物を使ってはさんで、つまんでごっこ遊び

0 歳児～
　安心した楽しい雰囲気の中で、見立て・つもり遊びをして遊ぶ

★子どもの姿（発達）に応じて適したものを用意しましょう！
（一つのものでもいろいろな年齢で使えます。）

★いろいろな人にアイデアをもらいましょう！

★安全面・衛生面に気を付けましょう！

様式

指導計画（日案）の概要

○○園　○歳児　○○組　指導案

令和○年　○月○日（○曜日）

男児○名　女児○名　計○名

担任　○○　○○

忘れず記載しましょう。

複数担任の場合は、全員を記載しましょう。

1．子どもの姿と保育者の願い

・養護面と教育面の両方を記載しましょう。
・混合保育の場合は、年齢ごとの記載をしましょう。

明日の保育の計画は、今日（あるいはこの頃）の子どもの姿（育ち）を捉えることからスタートします。

子ども一人一人に目を向け、発達の状況を捉える必要があります。子どもの生活や遊びへの取組、興味や関心、保育者や友達への関わりなどを通して、子どもの中に育ちつつあることを捉えていきましょう。

○最近の子どもの生活や遊びの様子

○集団の育ちに関すること（幼児）

○本日のねらい・内容に関する事柄

○子どもたちの姿から、保育者がどのような願いをもって、環境構成や援助をしているかについての記載

2．今月のねらい

○～～～～～

○～～～～～

養護面と教育面の両方を記載しましょう。

公開保育後の協議を受けて記載します。保育者一人だけの振り返りにならないようにしましょう。

3．本日のねらい（○）と内容（・）

○～～～～～

・～～～～～

○～～～～～

・～～～～～

ねらい（○）今日（あるいはこの頃）の子どもの姿（育ち）から、この時期にどのような育ちを期待するのか、そのためにはどのような経験を重ねてほしいのか、育つ方向性をねらいとして設定しましょう。

内容（・）ねらいを達成するために、保育者が指導し、子どもが主体的に環境に関わって経験することを内容として設定しましょう。

4．保育の展開

時刻	予想される子どもの姿や活動	環境構成	保育者の援助
8:30	○登園する。 ・持ち物の始末をする。		
	○好きな遊びを見つけて遊ぶ。 ＊砂遊び ・砂を掘ったり積んだりして遊ぶ。 ・器に砂や土などを入れてごちそうをつくって遊ぶ。 ・レストランごっこなどをする。		
11:00	○片付けをする。		
16:00	○降園する。		

登園から降園までを記載しましょう。

今日の子どもの姿（育ち）から、明日の子どもの姿を予想しましょう。

環境構成

子どもの生活する姿を踏まえて、ねらいに向かうために必要な経験が得られるような状況を考えましょう。

場所や空間、ものや人、自然、身の回りに起こる事象など子どもたちを取り巻くあらゆるものを環境として捉え、保育者の意図を込めて必要な環境を構成しましょう。

援助

明日の子ども一人一人の姿を予想し、子どもが周囲の環境と関わり、発達に必要な経験を自ら得ていくようにするためには、どのような保育者の関わりが必要となるのか、見通しをもって援助を考えましょう。

5．評価・反省

・～～～～～～～～

・～～～～～～～～

・子どもたちの生活や遊びの様子を捉え、子どもが学んだことを読み取りましょう。
・保育実践をもとに子ども理解、ねらいや内容、環境構成や援助が適切であったかを振り返り、明日の保育につなげていきましょう。

２歳児・５歳児　指導案（日案）例

ここでは、書き方の参考になるように、あらゆる視点から作成しています。分量が多くなりすぎないようポイントを絞り、最近の子どもの実態に即した計画の作成を心がけてください。

２歳児　うさぎ組　指導案

令和○年　10 月○日（○）
男子 10 名　女児８名　計 18 名
担任 ○○○○、△△△△、□□□□

１．この頃の子どもの姿と保育者の願い

戸外遊びが好きな子どもたちで、この頃は幼児組が使っている総合遊具の滑り台やユラユラ橋に行くことがある。しかし、滑り台の階段やユラユラ橋が高いため、保育者に助けを求めることが多かった。そこで乳児組の滑り台やジャングルジムに誘ったり、砂場に一本橋を架けて、うさぎ組の子どもたちが安全に遊ぶことができる場をつくったりすると、保育者を呼ぶことなく滑り台や一本橋で何度も繰り返し遊んでいる。一本橋が大きく揺れると「せんせい」と保育者に助けを求めてくることがある。安全に配慮しながら、一人一人の子どもが楽しみにしていることが実現できるよう心がけている。

室内ではままごとのお皿にごちそうを入れて、「これ食べて」と保育者に食べてもらったり、赤ちゃん人形をおんぶしたりして、保育者との関わりや、自分がしてもらったことを再現することを楽しんでいる。保育者も遊びの一員になって一緒に楽しみ、子どもたちが遊びに必要なものをすぐに使えるように、ままごとコーナーの遊具を用意している。ときには、ごちそうや場の取り合いで、「イヤ！！」「嫌い」と怒り叩くこともあるが、まずはそれぞれの子どもの気持ちを大事に受け止め、気持ちが落ちついたころを見計らい、相手の気持ちやその時の状況を伝えるようにして、一人一人の思いを大事にする援助をしている。気持ちの高まりから、ままごと道具をまき散らしたり、人形を乱暴に扱ったりすることもあるが、「おいしいご飯がこぼれちゃうよ」「赤ちゃんが痛いよーって泣いてるよ」などの声をかけて、遊具との関わりに気付けるようにしている。また、「○○くんが△△してるねえ」「どうして泣いているの」など、友達の様子を保育者に話す姿も見られ、友達の様子を気にするようになっている。秋の自然物も遊びに取り入れたいと思い、保育者がドングリや松ぼっくりを転がす遊具を準備したが、コースを転がすことよりも、コースにドングリや松ぼっくりを入れることや、穴から落とすことが多く見られ、転がすことよりも、コースに入れることや穴から落とす楽しさを味わっていた。

荷物の始末や着替えなどの生活面は、気持ちが安定しているときには自分でやってみようとするが、思うようにできないときや、午睡後などは気持ちの持続が難しいため癇癪を起こすこともある。やろうとしたことができたときには、自分でできた嬉しさを認め、やってみようとする関わりを大切にしている。排泄も自分で尿意を感じてできるよう、一人一人の排尿感覚や遊びの様子を見て声をかけている。

２．今月のねらい

○適度な運動や休息をとりながら、健康に過ごせるようにする。
○保育者や友達と一緒に体を動かして遊びを楽しむ。
○遊びや生活の中で、友達や保育者との関わりや会話を通して自分の思いや気持ちを伝えようとする。

３．本日のねらい(☆)と内容(・)

☆着替えや荷物の始末など保育者に手伝ってもらいながら、自分でできることは自分でしようとする。
　・服の脱ぎ着や荷物の片付けなどを自分で行い、難しいところは保育者に知らせる。
☆渡ったりぶら下がったりして、バランスをとりながら体を動かして遊ぶことを楽しむ。
　・一本橋を渡ったり滑り台を滑ったりする。
　・鉄棒やジャングルジムにぶら下がったり、ジャングルジムを上ったり下りたりする。
☆保育者や友達との関わりを楽しみ、思ったことを知っている言葉で伝えようとする。
　・ままごとなどごっこ遊びで保育者や友達に自分が伝えたいことを伝えながら遊ぶ。

４．保育の展開

＜１日の流れ＞

7:30 ○早朝保育を受ける
8:00 ○登園し、挨拶をする
　　・持ち物の始末をする
　○好きな遊びをする
　　・スポンジ積み木､ままごと、パズル、絵本等
　○片付けをする
　　･手を洗う　・排泄をする
9:20 ○おやつを食べる
　　・ブクブクうがいをする
　　・排泄をし、帽子を被る

9:50 ○戸外で好きな遊びをする
　　（砂場、滑り台、赤土山、鉄棒、ジャングルジム）
10:40○片付けをする
　　・足を洗う・着替える・排泄をする
　　・手を洗い水分を補給する
11:10○食事をする
　　・食器を片付ける
　　・ブクブクうがいをする
　　・排泄をし、パジャマに着替える
　　・絵本を見る

12:30○午睡をする
14:30○午睡から目覚める
　　・排泄をし、着替える
　　・好きな遊びをする
　　・手を洗う
15:00○おやつを食べる
　　・タオル・連絡帳をカバンに入れる
　　・降園活動をする
16:00○降園する
　○延長保育を受ける
18:45

～ままごと遊び楽しいな～

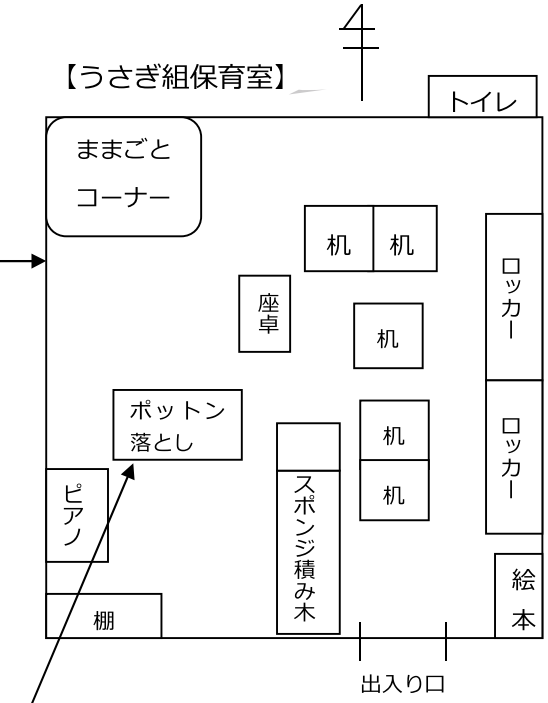
○赤ちゃん人形をおんぶしたり、寝かしつけたりする。
○エプロンや三角巾を付けて、ままごと道具の食べ物を鍋やフライパンに入れてかき混ぜたり、皿に並べたりして料理をする。
○作った料理を保育者に食べてもらう。
○「いただきます」「まだだめよ」など簡単な言葉のやり取りをして遊ぶ。
★自分で身に付けられるエプロンや三角巾などをままごとコーナーに準備しておく。
★自分でごちそうを作ることができるよう、棚に皿や鍋などは分類して並べておく。
★自分でもとの場所に分類して片付けられるよう、遊具別に写真で表示しておく。
◇一人一人の楽しみ方を見守りながら、保育者も遊びに入り友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられるような言葉をかけていく。
◇一緒に遊ぶ中で簡単な言葉のやりとりを楽しんだり、思いがうまく伝えられないときには気持ちを汲み取りながら、一緒に伝えたり共感したりしていく。

～秋の自然に触れて～

○ドングリや松ぼっくりを段ボールの穴に落として遊ぶ。
○ドングリ・松ぼっくりを袋に入れたり、手に持ったり、ままごとのごちそうにしたりして、触ったり遊びに取り入れたりする。
○園庭のドングリやせんだんの実・枝などを拾ったり、集めたりする。
★大きめの段ボール箱にドングリや松ぼっくりが入るくらいの穴を開けたポットン落としを準備しておく。
★ドングリや松ぼっくりを分類して置いておく。
◇一緒に遊ぶ中で、子どもたちの楽しんでいる所を探り、子どもたちと楽しさを共感する。
◇ドングリやせんだんの実や枝を保育者も一緒に集め、子どものつぶやきや不思議を受け止めながら、ともに秋の自然物を楽しむ。

○予想される活動
★環境構成
◇保育者の援助

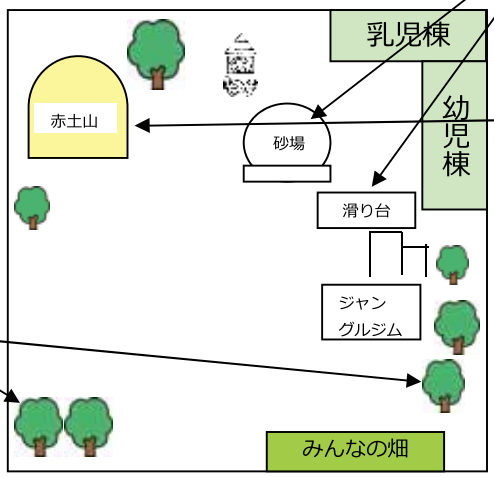
【うさぎ組保育室】



～生活の場面で～

○荷物の片付けを保育者と一緒にやってみる。
○自分で尿意を感じてトイレに行って排泄する。排泄後に手を洗う。
○排泄時の脱ぎ着など自分でしようとするが、困ったときは保育者に伝えて助けてもらう。
★登園時の様子を把握し、自分でできそうなことができるよう、荷物などの置き方に配慮する。
★パンツをはくために座る台の衛生面に気を付けておく。
◇自分で荷物の片付けをしているときにはその姿を受け止め、必要に応じて言葉をかけたり、さりげなく手助けをしたりしていく。
◇活動の区切りや一人一人の排尿間隔をみて声をかけるようにするが、できるだけ自分で尿意を感じて行けるように声かけをしていく。
◇ズボンやパンツを全部脱がずに排泄ができそうな子どもには、トイレ前で声かけをしていくようにする。
◇排泄後の手洗いを忘れる子どもには声かけをする。
◇自分でしてみようとする姿を認め、うまくできないときには「一緒にやってみようか」とさりげなく援助し、素直に助けが求められるような雰囲気を作り、見守る。

【園庭】



～見ててね～

○滑り台を滑ったり、はしごを渡ったりすることを繰り返す。
○ジャングルジムを登ったりぶら下がったりする。
○「ぼくも」「見ててね」と、自分がしていることを保育者に見てもらいたい。
○赤土山に上ったり下りたりして遊ぶ。頂上で「おーい」と保育者や友達を呼んだり、手を振ったりする。
★安全に安心して滑ったり渡ったりすることができるよう、乳児棟の側に滑り台や橋などを用意する。
★保育者間でうさぎ組の子どもの動きが共有できるよう、園庭の遊びの場を考慮しておく。
◇行動範囲が広がってきているので、保育者間で声をかけ合い安全面に配慮しながら、子どもたちが自分のやってみたいことが安心してできるようにしておく。
◇子どもと一緒に遊びながら、子どもたちが何をしたくて、何に困っているのかを探り、やりたい思いが実現できるように関わる。
◇子どもが自分なりに頑張ったり、できたと感じたりしたときにはその思いに共感し、一緒に喜び認めていく。

5．評価・反省

・公開保育後は、その協議を受けて記載します。保育者一人だけの振り返りにならないようにしましょう。
・子どもたちの生活や遊びの様子を捉え、子どもが学んだことを読み取りましょう。
・保育実践をもとに子ども理解、ねらいや内容、環境構成や援助が適切であったかを振り返り、明日の保育につなげていきましょう。

【乳児：個別の記録例】・・・２歳児については、「低月齢」「高月齢」で記載することもできます。

	生　　活	遊　　び
A児（10ヶ月）	・オムツ交換や着替えは、動きたい気持ちが強いので、スキンシップをとりながらも手早く行うようにしている。 ・午前寝をすることが多く、眠気があるとぐずぐずと泣きだし、抱っこを求める。 ・人見知りが見られ、慣れない人が来ると不安がり泣いて担任の所へ来る。 ・食事は、口を動かしよく食べる。「あ！あ！」と声を出し、“早く食べたい”という気持ちを表現する。少しずつだが、食べ物をにぎろうとする姿が見られ出している。苦手な食材は口から出す。（食後ミルク有）	・ハイハイからつかまり立ち・つたい歩きを盛んに行い、動くことを楽しんでいる。（トンネルをくぐったり、スロープを登ることも好きである） ・興味をもった玩具に手をのばし、カゴから出したり、なめたり、振ったりし、その感触や動きを試して遊ぶ。 ・オーボールなどを自分で投げては追いかけたりと、その動きを楽しみながら遊ぶ。 ・保育者に手を引いてもらい、歩くことを喜ぶ。
B児（8ヶ月）	・７月より入園。 （１６日からの登園のため、現在も慣らし保育中である） ・まだまだ園生活に慣れておらず、登園時から泣いて不安な姿が見られるが、少しずつ、保育者の抱っこで泣き止み、笑顔も見られだしたところである。 ・朝は眠気からぐずぐず言う姿があるので午前寝することで、機嫌良く食事へ向かえるようになってきた。 ・食事中イスに座ることは不安がるので、保育者のひざで抱かれて食べている。	・機嫌の良いときはハイハイで移動し、探索活動を楽しんでいる。 ・抱っこで触れられたり、あやされたりすることを喜び、笑顔が見られる。 ・興味をもった玩具に手をのばし触ろうとしたり、なめたりしてその感触や動きを試して遊ぶ。
C児（1歳2ヶ月）	・まとまっての排尿があるので、活動の節目でオムツがぬれていないときは、オマルに座ってみるよう誘っている。（タイミングが合えば成功する） ・着替えやオムツ交換では、「足あげてね」などの声がけに反応し、協力動作ができる。 ・午睡時に布団をしき、「おいで～ごろんしよう」と声をかけると、理解し、横になりに来る。 ・体をさすったり、歌をうたったり、保育者とのふれあいの中、心地良く眠りに入る。 ・食事の用意を始めると、自らイスへ寄っていく。 ・手づかみで意欲的に食べる。自分で両手でお椀を持ち、汁物を飲むようになってきた。	・絵本が好きで、保育者と一対一で読む中で「もう１回」と指を立てて、何度も読んでもらいたがる。 ・『バスにのって』や『いちり・にり・さんり』などのふれあい遊びも好きで、自ら保育者のひざに座りに来ては、何度も楽しむ。 ・チェーン落としやポットン落としを集中して繰り返し遊ぶ。 ・保育者に「まてまて～」と追いかけてもらう追いかけっこを喜ぶ。 ここでは、記録例として参考になるように、様々な視点から記録を記載しています。枠を全て埋めようとせず、一人一人の実態に即した記録を心がけましょう。

５歳児　らいおん組　指導案　例

令和○年 11 月○日（○）
男児７名　女児 11 名　計 18 名
担任○○　○○　支援○○　○○

１．子どもの姿と保育者の願い

友達を誘って戸外でドッジボールを繰り返している。「グーとパーの揃いぞね」のじゃんけんでチーム分けをして始めているが、チームの人数が揃わなくても始まることがある。チームの人数を同じにすることへのこだわりは今はあまりないようで、ドッジボールをすることが楽しいようである。子どもたちでドッジボールを進めているが、外野のボールをめぐって自分に都合のいいようにするため、遊びが中断することがある。自分なりの考えを言っている場面は子どもたちなりの解決方法を見守ることを心がけているが、一方的に思いを通そうとしているときは保育者が仲立ちをして、ルールについて共有できるようにしている。また自分なりの目標をもって、友達と一緒に逆上がりや跳び箱、雲梯などに取り組む姿がある。逆上がりや跳び箱はうまくできなくても何度も挑戦する姿が見られている。雲梯では一段飛ばしや後ろ向き、横の手すりを渡るなど、それぞれのやり方を試している。自分の目標が実現できるよう、その子なりのやり方を受け止め、嬉しい気持ちや残念な思いなどに共感していくことを心がけている。

室内では４～５人のグループで段ボールや空き箱を使って、家を作っている。子どもたちの話を聞いていると、“もりはおもしろランド”の絵本をイメージして家を作っているようで、家にどのような物を作るのか、何があるといいかなどを相談しながら作っている。

外から帰ると保育者が声をかけなくても、石けんで手を洗ってうがいをしている。忘れている友達がいると声をかけて知らせている。また、みんなで一緒に活動する前には、いない友達を呼びに行く姿がある。強い口調で呼ぶこともあるが、保育者は気持ちのよい呼び方を知らせるとともに、呼んでもらった子どもも呼んだ子どもも、友達のよさに気付く言葉がけを心がけている。クラスの一員と実感できることや、自分の思いを言葉で伝えることなどを大事にしながら、仲間づくり、クラスづくりをしていっている。

２．今月のねらい

○友達と一緒に刺激し合いながら、体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。
○友達と共通の目的をもち、工夫したり試したりしながら遊びを進めていく楽しさを味わう。
○衛生面に気を付けながら、手洗い・うがいを丁寧にする。

３．本日のねらい(☆)と内容(・)

☆友達と共通の目的をもって遊ぶ楽しさを味わう。
・友達を誘い合って、チームを決めたりルールを確認したりしながらドッジボールをする。
・段ボールや空き箱、色画用紙などを使って、友達と相談しながら家作りをする。

☆自分なりの目標やイメージをもって、挑戦したり工夫したりすることを楽しむ。
・逆上がりや跳び箱に挑戦したり、雲梯の渡り方を工夫する。
・落ち葉や木の実などの特性を話しながら、イメージしたものを作る。

☆健康に過ごせるように、うがいや手洗いを丁寧にする。
・石鹸での手洗いやうがいを丁寧にして、洗った後はハンカチで拭く。

○予想される活動
★環境構成
◇保育者の援助

４．保育の展開

〈１日の流れ〉

7:30　○早朝保育を受ける
8:00　○挨拶をし、所持品の始末をする
8:30　○登園する
　・挨拶をし、所持品の始末をする
　○畑の世話をする

9:00　○好きな遊びをする
　・友達と一緒にドッジボールをしたり鉄棒や雲梯に挑戦したりする
　・友達と考えを出しながら、家作りや保育室の飾り作りをする
11:00 ○片付けをする
　○みんなでドッジボールをする
　・手洗いやうがい、足洗いをする
　・給食の準備をする
11:45 ○食事をする
　・歯磨きをする
　・当番活動をする
　・体を休める

14:45　・おやつの準備をする
　・排泄、手洗い、うがいをする
15:00 ○おやつを食べる
　・帰りの身支度をする
　・掃除をする
　・園庭の玩具のパトロールをする
　○帰りの会をする
　・今日の出来事を伝え合ったり、明日の予定を聞いたりする
16:00 ○降園する
　○延長保育を受ける

18:45

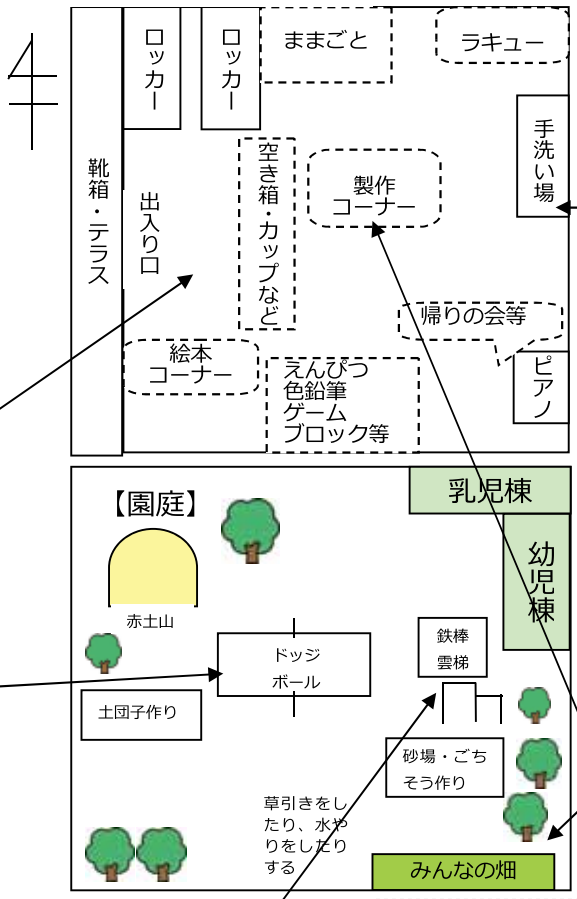
～共通の目的に向かって～

○友達を誘い合い“グーとパーの揃い”のじゃんけんでチームを決めてドッジボールをする。ボールを投げて当てることや逃げることなど、それぞれ楽しみにしていることを繰り返している。ボールの取り合いや自分に都合のよいルールにして、トラブルになることがある。
○仲間同士で段ボールや空き箱などを使って“もりはおもしろランド”の絵本や、家の中にある物等を相談しながら作る。

★子どもたちと一緒にドッジボールのコートを作ったり、投げたり当てたりすることができる丁度よいボールを準備しておく。
★子どもたちがイメージする家ができるように、十分なスペースや時間を確保する。

◇保育者も一緒にドッジボールを楽しみながら、ボールから身体をかわすスリルやボールを当てる楽しさなど、その子ならではの楽しさが感じられるように援助する。
◇思い切りドッジボールを楽しんでいる子どもたちの姿を捉えて、学級全体で遊ぶ楽しさに広げていく。
◇自分の思いを強く通そうとして遊びが中断するような時は、子どもたちの思いや考えを引き出し、状況に応じて保育者の考えも提案し、友達と一緒に遊びを進めていくことができるように援助する。
◇自分の思いを伝えたり相手の思いを聞いたりして家を作り上げていこうとする姿や、工夫しているところを受け止め、子どもたちがお互いのよさに気付く言葉がけを心がける。子どもたちに戸惑いが見られる場面では、保育者もアイデアを出して、子どもの思いが実現できるように援助する。
◇思いがつながり喜び合っている場面を大事に受け止め、仲間意識が高まっていけるようにする。

【らいおん組保育室】



～自分たちでやっているよ～

○友達を誘って芋畑の雑草を引いたり、花壇のパンジーやなでしこに水やりをしたりして、栽培しているものの世話を自分たちでする。

○園庭から保育室に帰ってくると、石けんを泡立てて手を洗ったり、うがいをしたりしている。

○グループで声をかけ合って、昼食の当番活動をしようとしている。

○降園前の片付けでは、ほうきでごみを集めることや、床の雑巾がけで速さを競ったり、誰も拭いていない所を見つけて拭いたりすることを楽しんでいる。

★子どもたちが花の水やりに気付いた時、すぐにできるように、テラスの見えやすい所にジョウロを並べておく。

★雑巾掛けが楽しくなっているので、子どもの要求に応じることができる数の雑巾を、雑巾掛けに用意しておく。子どもが使いやすいほうきを、出し入れがしやすい場所に置いておく。

◇自分たちで生活や遊びを進めていこうとする姿を認めていく。

◇子どもと一緒に片付けをしながら、今日楽しんだことを子どもたちと共感しながら、明日につながる言葉がけをする。

～自分なりの目標やイメージに向かって～

○友達がやっている逆上がりや連続回りを見たり、やり方を教えてもらったりして挑戦している。できるようになると「見ててよ」と、友達や保育者に見てもらいたい。

○雲梯を早く進んだり一段飛ばしをしたりしながら、自分なりのやり方で何度も繰り返している。

○園庭の柿の葉やいちょうの葉、ピラカンサスの実、エノコログサなどを集めてイメージした物を作ろうとしたり、友達が作っているものを見て、自分も紙に描いたり貼ったりしている。

★雲梯や鉄棒の周りに障害になるような物がないか確認しておき、子どもたちが安全に遊ぶことができるように整備しておく。

★子どもたちが見つけてきた柿の葉やイチョウの葉、ピラカンサスの実等、分類整理できるように、葉や実が入る丁度よい大きさの容器を置いておくとともに、ボンドや紐等、製作に必要な用具も準備しておく。要求してきた物がない場合は、子どもと一緒に見つけたり探したりする。

★段ボールや空き箱を分類して使いやすい所に置き必要なものを子どもたちが選んで使えるように整理しておく。

◇その子なりの目標に向かって頑張っている姿を見守ったり励ましたりしながら、目標に向かって取り組むことができるように援助する。

◇工夫したり試したりしている姿を受け止めて、認める言葉かけをし、やりたいと思っていることが実現できるように援助する。困っている時などは、一緒に考えたりアイデアを提案したりして、やり遂げる喜びが味わえるように援助していく。

◇イメージしたものを作ることができるよう見守ったり、工夫しているところを認めたりしていく。また、その子なりに工夫していることを周りの子どもたちにも知らせ、友達の頑張りやよさに気付くことができるように援助する。

５．評価・反省

・公開保育後は、その協議を受けて記載します。保育者一人だけの振り返りにならないようにしましょう。
・子どもたちの生活や遊びの様子を捉え、子どもが学んだことを読み取りましょう。
・保育実践をもとに子ども理解、ねらいや内容、環境構成や援助が適切であったかを振り返り、明日の保育につなげていきましょう。

園名：　　年度：

週日案記載例（1週間終了時）　　３歳児　うさぎ組　　１０月第３週　　週日案　　担任名　○○　○○　　所属長印

先週の子どもの姿	・運動会を一人一人が楽しかったという思いで終えることができた。運動会は終わったが、多くの子がまだまだ”運動会ごっこ”を楽しむ姿が見られる。 ・裸足になることを嫌がっていたA児も運動会に向けて取り組む中で進んで園庭に出る姿が見られるようになった。好きなブロック遊びで満足感を得られるようにしたことで、気持ちの切り替えも早くなったようだ。B児は、ポックリが上手になったことで自信をつけ、登園時間も早くなり、遊びに向かう姿もより生き生きしてきているなど、新しいことに意欲的な姿が多く見られるようになった。 ・外遊びの前後に、少人数でのごっこ遊びを続けて楽しむなど、それぞれが好きな遊びを楽しむ姿が見られるようになってきた。 ・外遊びの後の手洗いが随分と身に付いてきたが、あわてた時や次にしたいことがあると抜かることがある。			**保健・食育・安全への配慮** ・水分補給ができるよう、こまめに声をかけていく。 ・遊具等の点検を活動前に必ず行い、危険な行動については注意を促す。 ・戸外遊びやトイレの後の手洗いがぬからないよう、声をかけたり一緒に洗ったりする。	**家庭との連携** ・運動会のお礼と遠足に向けてのお便りを出す。 ・手洗い、うがいの大切さを伝え、家庭でも取り組んでもらう。
	１０月１５日（月）天気（晴）	１０月１６日（火）天気（雨）	１０月１７日（水）天気（雨）	１０月１８日（木）天気（曇）	１０月１９日（金）天気（晴）
ねらい（◎） **内　容（△）**	◎戸外でのびのびと身体を動かして、遊ぶ楽しさを味わう。 △先生や友達と一緒に運動会ごっこを楽しむ。 △音楽やリズムに合わせて楽しみながら体を動かす。 ◎気の合う友達と好きな遊びを繰り返して遊ぶ楽しさを味わう。 △気の合う友達とごっこ遊びや製作遊びを楽しむ。 ◎自分でできる簡単な身の回りのことを自分でしようとする。 △戸外から帰ってきた時は、手洗いやうがい、着替えなど身の回りのことを自分からしようとする。			◎木の実や落ち葉など、秋の自然物に触れて遊ぶことを楽しむ。 △気の合う友達と同じどんぐりやイチョウの葉を集める。	
【生活の流れ】 ９：００ 登所 所持品の始末 ９：１０ 好きな遊びをする １０：４０ 運動会ごっこ １１：３０ 昼食 １２：３０ 午睡 １５：００ おやつ １５：３０ 所持品の始末 降所活動 １６：００ 降所					
子どもの主な活動	・楽しかった運動会の取り組みを気の合う友達と一緒に繰り返して遊ぶ。 （かけっこ、ボール転がし、一本下駄、年中組の競技のまね） ・外遊びの前後に、先週から続いている少人数でのごっこ遊びで、役になりきって遊ぶ。 （レストランごっこ、病院ごっこ） ・身近にある物で、切ったり貼ったりして遊ぶ。		**みんなで引っ越しゲーム、島渡りゲームをする。**	赤字は保育の反省・評価から見直し、追加した事項 ・園庭の木の実と落ち葉を拾って、遊びに取り入れる。	**・みんなで追いかけ鬼をする。**
環境構成（★）援助（○）	★登園したらすぐに運動会ごっこが楽しめるように、予め運動会ごっこに必要な用具（一本下駄、ボール、ＣＤ）を準備しておく。 ★製作に必要な物（折り紙・テープ・ひも・包装紙）を子どもの見える所に種類別に置いておく。 ○運動会後の楽しかったという気持ちに共感し、他のクラスの競技を見て「やってみたい」「まねしてみたい」という気持ちを受けとめる。 ○子どもと一緒に遊びながら、楽しい雰囲気をつくる。 ○その子なりの「もの」との関わりを認めながら、危険がないように見守る。 ○やりたい気持ちからぶつかり合うことがあったら、その気持ちを受け止めお互いの気持ちを保育者が伝える。 ○自分から進んで身の回りのことをしようとする姿が見られたときには、褒めたり、認めたりして、次への意欲につなげていく。		**★友達と関わりがもてるように机を１つ出して製作コーナーを広げる。** **★ホールでマット遊びができるよう取りやすい所に出しておく。** **★フラフープや鳴る子なども準備しておく。** **★プリンカップなどの空き容器を出す。**	★子どもたちの見える場所に、集めた秋の自然物が見えるように置いておく。 ★集めた木の実や落ち葉を入れたり、持ち帰ったりできるようにビニール袋等を **子どもが取りやすい場所に** 準備しておく。 **★園庭で拾ったドングリを子どもの目にとまりやすい所に置いておく。** ○興味をもった子どもと一緒に木の実や落ち葉を集め、どこに行くと同じ木の実や落ち葉が見つかるか伝えていく。 ○集めた木の実や収穫したものを見立てたり、ごっこ遊び等に使ったりする姿を認め、遊びの一員になる。	
反省・評価 **養　護** **教育** **健康** **人間関係** **環境** **言葉** **表現** **保健・食育・安全** **家庭との連携**	“運動会ごっこ”に必要な用具を予め準備していたことで、年長児のしていた係の仕事を真似して自分たちの遊びに取り入れる姿が見られた。係の仕事をめぐってトラブルがあったが、やりたい気持ちを受け止めながら、譲ったり順番を決めたりすることを急がないように、「困ったねぇ」と投げ返すようにした。Ａ児はやりたいの一点張りだったが、Ｂ児が一緒にやろうと言ったのを受け、あっさりと２人ですることとなった。笑い合ってしていたので良かったが、Ｂ児が我慢しすぎていないか見ていきたい。	雨のため、製作コーナーで遊ぶ子どもが昨日より４人増えたので、机を１つ出した。そのため、Ｃ児とＤ児が並んで座り、お互いの作ったものを見せ合いながら作っていた。切った折り紙を入れる容器が欲しいようで、小さい牛乳パックに入れていたので、明日は小さめの空き容器を追加したい。 昨日の続きの“運動会ごっこ”ができなかったため、Ｅ・Ｆ・Ｇ児が残念がっていたので、明日はホールで“運動会ごっこ”ができるように環境構成する。	ホールでマットを使った遊びをしたところ、思いきり身体を動かすことができ、非常に喜んだ。マットの色などから食べ物や園の遊具等に見立て、好きなマットに移動する引っ越しゲーム、島渡りゲームを行った。Ｈ・Ｉ児等おぼつかない子どもには、Ｊ・Ｋ児等が優しく手を引いて参加できるようにしていた。Ｌ・Ｍ児も運動会をきっかけに仲良しになっている。まだまだトラブルは多いが、それぞれ気の合う友だちができている。	プリンカップを出したことで、昨日から作ったものを入れて見合ったりする姿が見られていたが、今日は切った折り紙をごちそうに見立てごっこ遊びと行き来する姿があった。Ｎ児はひたすらいろんな色の折り紙を切っては４個のプリンカップに入れ分けていた。ハサミの使い方も上手になって切りたい大きさに切れているようであった。 絵本コーナーの横に置いていたドングリを数人の子が見つけ、どこで見つけたのかとさっそく興味を示していた。	今朝、Ｏ・Ｐ児が家の近くで見つけたというドングリを持って来た。園のドングリとは種類が違ったこともあり、Ｑ・Ｒ児は少し分けてもらってごちそうと称してごっこ遊びに取り入れていた。今後木の実の種類が増えてもいいように、種類別に置き場の工夫をしたい。 “運動会ごっこ”は早めに終わり保育者を追いかける鬼ごっこをみんなでした。大好評で「またやろう」と繰り返し遊ぶ姿が見られた。Ａ児がムードメーカーになっている。集団で遊ぶ楽しさが感じられたのではないだろうか。

本手引きは、平成 23 年 3 月に作成した「指導計画・園内研修の手引き～つくろう　笑顔の輝く明日の保育～」を改訂したものです。

【監　　修】（平成 23 年 3 月）

高杉　展　　松山東雲女子大学　心理子ども学科　教授

【監　　修】

岡上　直子　國學院大學　非常勤講師（元　十文字学園女子大学　教授）

有田　尚美　高知県幼保支援スーパーバイザー（元　高知学園短期大学　准教授）

【参考文献】

・文部科学省「幼稚園教育要領」（平成 29 年 3 月告示）フレーベル館

・文部科学省「幼稚園教育要領解説」（平成 30 年 3 月）フレーベル館

・厚生労働省「保育所保育指針」（平成 29 年 3 月告示）フレーベル館

・厚生労働省「保育所保育指針解説」（平成 30 年 3 月）フレーベル館

・内閣府　文部科学省　厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（平成 29 年 3 月告示）フレーベル館

・内閣府　文部科学省　厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」（平成 30 年 3 月）フレーベル館

・文部科学省　幼稚園教育指導資料第 1 集「指導計画の作成と保育の展開」（平成 25 年 7 月改訂）フレーベル館

・文部科学省　幼稚園教育指導資料第 5 集「指導と評価に生かす記録」（平成 25 年 7 月改訂）フレーベル館

・文部科学省　幼稚園教育指導資料「幼児理解に基づいた評価」（平成 31 年 3 月）チャイルド本社

・小田　豊監修　岡上　直子・高梨　珪子編著「保育者論」（2012 年）光生館

・神長　美津子著者「魅力的で特色ある園をめざして」（2019 年）フレーベル館

・神長　美津子監修・編著「３・４・５歳児のごっこ遊び」（2017 年）ひかりのくに株式会社

・今井　和子監修「育ちの理解と指導計画【改訂版】」（2019 年）小学館

・那須　信樹著者代表「手がるに園内研修メイキング　みんなでつくる保育の力」（2016 年）わかば社

指導計画・園内研修の手引き　～つくろう　笑顔の輝く明日の保育～【改訂版】

発行年月日　　令和 2 年 3 月

発行・編集　　高知県教育委員会事務局　幼保支援課

〒780－0850　高知市丸ノ内一丁目 7 番 52 号

ＴＥＬ　088－821－4881